# 城北会千葉支部会誌

第３号

平成 18 (2006) 年 11 月

城北会千葉支部

## はじめに

城北会懇親総会は今年も 7 月 8 日に京王プラザホテルで行われました。毎年400～500 名の方々が集まっています。

城北会にはその他に各地域毎の支部があり、北海道城北会、関西城北会、千葉城北会、紐育（ニューヨーク）城北会などがあります。

その内でも我々の千葉城北会は平成 16 年に発足された会誌第 1 号でまとめられたように発足の時点も早く、又長く続けられており、これからも続けていきたいと考えています。

その他にも会社の城北会（東芝など)、大学の城北会（北里など）があり、又業界全体の城北会としては都市・建築城北会（昨年まで建築城北会であったものを名称変更した。）があります。

案内の内容をみますと毎年 300 余通の案内を出しますが出席者は 30～40 名であり、もっと多くの方の出席が得られるようにしたいと考えています。

今年の会誌 3 号は三潴正道氏（S42 年卒）の講演の内容の紹介、重松高明氏（S18 年卒）の四中時代の話をまとめました。今年は会員の寄稿も増えましたので今後も皆様の御協力を得て会誌も充実させ発行を続けたいものと思います。

平成 18 年 11 月

城北会千葉支部

支部長　　尾崎英二

平成17年度千葉城北会記念講演

# 「日中異文化おもしろ講話――もう中国ビジネスは怖くない」

講師：三潴正道（みつまままさみち）氏（麗澤大学教授）

**三潴正道氏プロフィール：**

昭和23年生れ、昭和42年戸山高校卒。
東京外国語大学大学院修士課程修了。
現在、麗澤大学中国語学科教授、立教大学講師等。
「日中異文化コミュニケーション研究会」代表世話人。
日中翻訳プロ養成組織、而立会を主宰。
（株）海外放送センター顧問。
MMメソッドと呼ばれる独自の中国語教育システムを考案。時事中国語研究の専門家としても知られる。
日中異文化コミュニケーション論と、それに基づく現代中国分析には定評があり、中国進出企業で多くの講演をこなしている。
著書に「現代中国放大鏡」「中国トピックス」「現代中国13の素顔」「現代中国走馬看花」「知りたいことがしっかりわかる実践中国語文法」「MM式中国必要会話７７７」など多数。
ｗｅｂ上では毎週月曜日更新の時事問題解説コラム＜現代中国放大鏡＞を連載中。
（http://www.chinavi.jp/koramu.html）

## 講師紹介

最近の日中関係は「政冷経熱」といわれるように、政治面では靖国参拝問題のようにぎすぎすした関係が続いていますが、経済面では大変な勢いで日中友好が進んでおります。しかし文化の違いから、経済面でもいろいろトラブルがあるようです。これは近い国でありながらお互いに相手をあまりに知らなさ過ぎることに原因があるように思います。

そこで今回は、現実の中国に詳しい戸山同窓の麗澤大学教授三潴正道氏を講師にお呼びして、身近なコミュニケーションにおける日中の違いや気をつけなければならない問題を、面白おかしくお話していただくことにしました。三潴氏は現在の中国事情にもっとも詳しい一人です。これから中国とお付き合いをしていくビジネスマン、あるいは観光で中国を訪れる人にとっても参考になるお話が聞けるものと思います。ご静聴願います。

なお、今回の講師選定は本橋輝明副支部長の推薦によるものです。

城北会千葉支部長　尾崎　英二

## はじめに

1993～95年頃、日本のかなりの企業がわけも分からずに中国にどっと出て行き、大やけどをしました。その反省から90年代後半には「単に工場をつくって、人を雇って、物をつくればいい」というものではない、もっとお互いの文化の違い、背景を理解しないといけないのではないか、という気運が出てきました。私の経験からしても1997～98年頃から、それまでこちらがいくら口を酸っぱくしても耳を貸さなかった大企業から、中国について話をしてくれないか、という依頼がくるようになりました。担当者や会社上層部に話をしてくれ、というのです。2001年に中国がＷＴＯに加盟するとそれが一気に加速して、今のところ週１回のペースでこれらの企業で講演をしています。

これら企業と関わって逆に背筋の寒い思いをするのは、これほどの大企業がこれほどの投資をしながら、これほどまでに中国を知らなかったのか、ということです。経済学者がいうようないろいろな統計数字には詳しい。しかし、およそ中国というものを知らない。そのために、いろいろなところでトラブルを起こしています。まことに驚くべき、憂慮すべきことであります。「異文化コミュニケーション研究会」という大きな学会があって、90年代半ばに大会があって私も顔を出したのですが、そのときに驚いたのは、300人くらいの研究者が集まっても、その中で日中関係について話をしたのは私ただ一人でした。他の人はみな日本と欧米の関係がテーマで、そこで研究しているメソッドのすべてがアメリカの理論でした。例えば、アメリカ人がよくやるように、中国人と会ったらまず抱きついて、足の裏でもポンと合わせたら仲良くできるかといったら、そうはいかないのです。そのとき私は「これはダメだ」と思いました。「自分で立ち上げるしかない」、そう思っているところに、外務省で中国語の翻訳・通訳では日本一の松本盛雄さん（北京で部長をされて、いま香港におられる）の奥さん（東京外語大で一緒だった）に、「私が事務局をやるから、三潴さん、あなた研究会をつくりなさいよ」といわれて、「私などおこがましい」といったのですが、「そんなこと言ったって、やらなければだめでしょう」と尻をたたかれて、「日中異文化コミュニケーション研究会」を立ち上げました。それがだんだんと輪を広げているというのが背景であります。

## １．ところ変われば

### 「壽店」「壽衣」って何のこと？

「壽店」「壽衣」と聞いて何だと思われますか？

「壽店」だからブライダルショップ？「壽衣」はウエディングドレス？

とんでもない。「壽店」は葬儀屋、「壽衣」は死人に着せる死に装束のことです。

「壽」という字は「壽命」ということですから、台湾に行くと霊柩車の後ろの扉に「壽」と書いてあります。白地に「壽」で結婚祝い？　とんでもない。お弔いです。さらにこれに「亀」の形をした和菓子でもつけたら最悪です。「亀」というのは中国では、親子・兄弟かまわず交合する「背徳の一番の象徴」ですから、白地の生地に「壽」と書いて、これに

「亀」の和菓子でも添えたら、「お前、俺のことを何だと思っているんだ」ということになります。

これほど極端ではなくても、ちょっとしたことで我々の常識とは逆な例はいくらでもあります。例えば「夫婦」と「夫妻」の使い分けです。日本では「私ども夫婦は」「あなた方ご夫妻は」といいますが、中国で「フーフー（夫婦）」というと「ご夫妻」という丁寧な意味です。「フーチー（夫妻）」というと日本の夫婦とおなじ俗な言い方です。ですから「私ども夫婦は」というのであれば、最後に「夫妻」をつけなければいけません。「あなた方ご夫妻」というのであれば、最後に「夫婦」をつけなければいけません。逆転しているわけです。

日本では「私、こんどこの会社に就職しました」といいますが、中国で「就職」というと「部長」か「社長」に就くこと、あるいは「大臣」に就くことです。普通の就職のときは「就業」と書かなければいけません。「私、こんど○○大学を卒業して、○○会社に就職しました」などというと、「あなた社長になったの？」と相手はびっくりしてしまいます。細かいことのようですが、同じ漢字を使っているからと安心するといろいろ問題が起きます。さらにはそれが、ときにはとんでもないことに発展して、無邪気が無邪気ではすまなくなるので注意が必要です。

ある企業に行って私が「７月７日は何の日ですか？」と聞くと、「七夕です」という答えが返ってきました。それは七夕には間違いありません。しかし日本とは違います。これほど多くの人が中国とビジネスをやっていながら、ほとんどの人が知らない。７月７日といったら「盧溝橋事件」でしょう。1937年７月７日といったら、北京郊外の盧溝橋で起きた演習中の日本軍が銃撃を受け、翌日から交戦状態に入る「日中戦争」のきっかけとなった日です。中国にとっては日本に最初に侵略された大変屈辱の日なのです。日本のある大手企業が、７月７日に製品を発売して、大々的に宣伝をして、大顰蹙を買いました。日本でも超有名な会社ですが、これでミソをつけてしまったのです。油断は禁物です。知らないで済むことと済まないことがあります。

## 「我孫子行き」には乗りたくない

常磐線には「我孫子」という駅があります。私はその隣の柏に住んでおり、大学も柏にありますが、天津から来た留学生が、「私はいま留学生活に大変満足していますが、ただ一つだけどうしても抵抗があります。それは東京から帰ってくるときに『我孫子行き』に乗らなければならないことです」といっていました。我孫子というのは中国では「ウォスゥンズ」といいます。「私の孫」という意味です。中国では「あなたのお子さんは素晴らしいお子さんで、私の子供同然、私の孫同然です」というと、これは大変な罵り言葉です。「私の子供同然」ということは、相手の奥さんと不倫するかレイプでもしない限り自分の子供にはならない。「私の孫」ということは、相手のおばあちゃんとHな関係をもつことです。中国では「七代先霊」といって、七代前の霊をレイプするというのが、相手に対する最大

の無礼な罵り言葉です。儒教では先祖を尊ぶ教えがあるので、代が上がれば上がるほど失礼になるわけです。従って「我孫子」というのは大変な罵り言葉になります。それでその留学生が「我孫子行き」に乗ることには抵抗があるというのです。「ずいぶん変な考え方をするな」「ちょっとおかしいんじゃないの」と思うかも知れませんが、異文化コミュニケーションというのはそういういろいろな考え方があることを理解することです。

## 2．法律から身を守る？

日本と中国では歴史的背景が違うので、社会の仕組みや考え方も違ってきます。

「法律から身を守る」というタイトルは変だなと思われるかも知れませんが、これは中国人の「法意識」や「社会構造」を見る場合にぜひとも知っておかなければならないことなのです。

例えば、日本で皆さんに「法律がなくてもいいですか」というと、ときには税金が重すぎるなど気に入らない法律もありますが、法律がなければ無法地帯になり、安全な生活が営めなくなるので、「そりゃ、法律がなくては困る」ということになります。

### 自己防衛の社会的システム

ところが、中国では20世紀の終わりの2000年までは民衆にとって法律というものは敵でした。いや、現在でも二千年、三千年という歴史の中で「いかに法律から命、財産、家族を守るか」ということが第一義的であったことは生きていて、それに合わせてすべての社会の仕組み・価値観ができています。

実は、中国で裁判官、検察官、弁護士、公証人になるには司法試験に合格しなければならないと法律で決まったのは2001年のことで、21世紀に入ってからです。20世紀まではそれがなかったのです。

#### ①“昇官発財”

では、どうやって裁判官になったのかというと、地方の為政者が自分に都合のいいように法律を曲げて解釈してくれるような人を送り込んで裁判官にしていたのです。しかも裁判官は地方公務員で、昇給・賞罰などすべて地方の権力者の手に握られていました。だからいうことを聞く。どんな立派な法律があっても、解釈と運用は裁判官、もしくは検察官ですから、正当な裁判が行われるはずがない。いま現在でも商事紛争や会社トラブルがあっても、いくら中央の裁判所で勝訴しても執行されない。なぜか。地方の裁判所が地方の権力者のいうことを聞いて、執行させないからです。

このような中国で、いかにして法律から身を守るか。昔の言葉で「苛政は虎よりも猛し」――ひどい政治は虎よりも猛々しく人を食い殺す、と言いますが、法律から身を守るということは大変な問題だったのです。

では、彼らはどうやって身を守ったのでしょうか。

一つは自分が権力者になることです。これが一番手っ取り早い。非圧迫者から支配者に

なれるからです。権力者になるには科挙（官吏登用試験）という制度が昔からあって、科挙に合格すればみな権力者になれます。だから科挙に受かるためにみな血眼になったのです。

大家族で一人でも頭のいいのがいれば、同世代の者は全部勉強をあきらめて働いて学資を貢ぐ。合格したら“昇官発財”といって、官職に就いて財産をつくる、つまり権力者になってお金持ちになり、そして自分を支えてくれた人に恩返しをする。これが最高のモラルであります。これは権利として許されています。驚くべきことに、明の時代には本来利用すべき地位を利用して財産を蓄えることをしなかった人、まことに奇特な人間がいたとすると、そういう人には財産を補填してあげましょうという法律がありしました。つい最近でも似たような法律ができました。「賄賂をもらうな、そのかわり補填してやるから」というものです。「財政から補填してやる」ということ自体おかしな話ですが、そうでもしないと千年、二千年続いた習慣はなかなか直らないのです。

このような形で科挙を通して社会のアッパークラスに入る、というのが封建時代のパターンでしたが、これが「辛亥革命」以降はなくなりました。そこで、1980年代には海外留学によって箔をつけて帰ってきてアッパークラスに入ろうとする時期がありました。2001年のＷＴＯ加盟以降は大学院で「ドクター」を取得することによって地位を得ようと、猫も杓子も大学院に行きたがるようになりました。

＊　辛亥革命：1911年辛亥の年に武昌で挙兵し、清朝を倒した民主主義革命。1912年、孫文が臨時大統領となり共和制を宣言、「中華民国」誕生。

**②賄賂は甲斐性**

それでは頭のいい人がいない家族はどうするか。これは一生懸命、汗水流してせっせと働いて、それで財産をためて要路の役人に付け届けをして自分達を守ってもらう、これが伝統的に行われてきた中国人の生き方です。

東京にいるある華僑と食事をしたときに、私が「中国の賄賂には日本の企業も困っている。日本だって裏に回ればいろいろあるが、中国のはひどすぎる」といったら、彼が即座にいったのは「賄賂の何が悪い？」でした。「賄賂の何が悪いか、と聞かれると返事に困るが、たくさんお金を出した人が優遇されるのは不公平ではないか」と私がいうと、彼は「それなら飛行機のファーストクラスは何だ。あれは賄賂か？」という。「いや、あれは賄賂ではない」と私がいうと、「同じではないか。懸命に働いて金のある人はファーストクラスに乗る。金のない人はエコノミーに乗ってエコノミー症候群になってぽっくり死ぬ。これは仕方がないことだ」という。最後に「三潴さん、あなたは甲斐性がないからそういうことをいうのだ」といわれました。結局、私は甲斐性なしにされてしまいました。

そのときに私が「なるほど」と思ったのは、中国では族長たるもの一生懸命働いて財産をつくって、それで付け届けをして一族を守ってもらう、これは“族長の最大の義務”なのです。

従って、贈る方も贈られる方も、当然の権利と思って千年、二千年、生きてきているか

ら、五年や十年で急になくなるはずはない。ですから、中国の賄賂というものは、政府が躍起になってもそう簡単になくなるものではありません。日本企業にとってはまことに頭の痛いところであります。

**③秘密結社**

多くの庶民、つまり農民や労働者は、それほど頭も良くなければ、付け届けをするほど大枚のお金もない。ではあきらめるしかないのかというとそうではありません。この人たちは弱い者なりに皆で集まってグループをつくって助け合う、これが中国の「結社」です。

中国の歴史というものは、ネガの方から見ると、まさに「秘密結社」の歴史です。王朝の交代というのは基本的には「秘密結社」による政変です。ついこの間まで、愛新覚羅の満州族に支配されたという異民族支配の歴史が長くあるので、余計に「秘密結社」が発達しています。洪秀全の「太平天国」（清代の 1851 年、宗教結社「上帝会」の洪秀全が建てた国）にしても、1911 年の「辛亥革命」でも秘密結社と切り離せませんし、蒋介石でも（中華民国総統、1887～1975）後ろにチンパン、ホンパンという秘密結社がついていました。共産革命でも、十大元帥の一人に数えられる賀竜（がりゅう）という将軍は「哥老会」という中国最大の秘密結社の大親分の一人でした。

鄧小平の「改革解放」以降、全国に雨後の筍のようにたくさん秘密結社ができました。なぜ「秘密」がつくかというと、法律から身を守るのですから合法的なことをしていたら守れないのです。法律に違反して身を守るのですから、当然「秘密結社」になるわけです。これが一つ間違えば「暗黒界」になって、マフィアになっていくわけです。資金源でも裏でいろいろつながりがあります。こういったものが政治に必ずからんできます。

そういうなかで、彼らは「自分達を守ってくれるのは法律ではない、命をかけた仲間達である」と思っています。ではそのつながりは何かというと、姓を同じくする、出身地域が同じである、同業者である、同窓生であるなどさまざまな紐帯を使ってこれを組織します。秘密結社のなかでは鉄の掟があって、時には符号があって、「ふぐのせり」ではないが握手したときの指の動かし方などで相手を確認する方法まであります。そこまでしてお互いに助け合うのです。

さらには世界的なネットワークがあって、例えば自分の子供がロンドンでホテルを始めたいとすると、グループ仲間の人がすぐ我が子のように資金援助から商売の仕方まで全部手伝って、教えて、立ち上げさせてくれるのです。

こういったものを維持していくために、マナーや習慣がすべてできあがっているのです。このような中国社会の基本的な構造を理解しないと、中国人とつきあう時にどうしたらいいか見当がつきません。

## 3．中国社会の通過儀礼——宴会

### 「自己人」と「準自己人」と「赤の他人」

中国社会では「自己人」（中国語では「ツーチーレン」といって“内輪の人間”という意

味）という、命がけで助け合うテリトリーがあって、外国人はなかなかそこには入れません。

しかし、外国人でも腹を割って付き合える本当の親友・知己の仲になりますと、自己人に準ずる内輪の人間、つまり「準自己人」として扱ってくれます。それ以外の人間は「赤の他人」であります。

中国社会の非常に面白いところは、この「赤の他人」と内輪の人間に準ずる「準自己人」の落差がものすごく大きいことです。目もくらむような落差があるのです。

中国へ進出した日本の企業がよく売掛金を回収できないとこぼしていますが、それは信頼し合える人間関係ができていないからです。ビジネスのメカニズムをきちんとしただけではうまくいきません。目に見えないところでいかに知己になるかということが、実はお金を払ってもらえるプライオリティに大きく影響します。

ところが、中国に10年行っていた、という人の人に話を聞いて、「あ～あ、この人は長くいてもこのやり方では中国人は心を許さなかっただろうな」ということがよくあります。後ろに大企業の看板があってたくさんお金を持っているから下へも置かぬもてなしはするでしょうが、本当はこの人は心の付き合いをしていないから、だいぶ損しているなと思うことがあります。

## “煙酒不分家”

では、中国人との付き合い方をどうしたらいいかということになりますが、そこで大事なのが「宴会」であります。

中国の宴会はフランス料理のようなめんどうなルールがないようであって、実はマナーの面で大変なルールがたくさんあります。しかしこれを、中国に何年もいて、「そんなこと全然知らなかった」という方もおられます。

とにかく、中国人にとっては一緒に食事をするということが、何にもまして必要な“通過儀礼”であります。そこでお互いを知り合う、肝胆相照らすのです。

日本ですと、タフなネゴをやって全部話しがまとまって“シャン、シャン、シャン”となってから、「では前途を祝して、今日はゆっくりみんなで食事をしましょう」となります。しかし中国ではまず先に食事をします。トラブルがあれば食事をする、“食べることが先”という傾向が中国では強くあります。

問題はそこでルールがいろいろあって、これをわきまえておかなければならないということです。どういうことかというと、お互いによく知り合うのですから、ざっくばらんに、カッコつけずに、「フーテンのトラさん」ではありませんが“打ち解けあう”、そのためにあらゆる努力をするというのが中国の宴会のマナーです。

しかし、ざっくばらんだからといって、ワーワー、ギャーギャーやりすぎてはいけません。私も中国に百回以上行って、宴会は何百回やったかわかりませんが、一度たりとも中国人が我を忘れて乱れた姿を見たことがありません。それをやったら中国ではアウトです。

どんなにフランクにやっても、“相手を愉快に楽しませる”“気持ちよく過ごしてもらう”というのが第一義ですから、それに反することは絶対にしません。これが大事なことです。それでいて、カッコつけずに、楽しく愉快にやる、これが中国での宴会です。

よくいわれることですが、“煙酒不分家”というように、酒と煙草が大事な小道具です。煙草を吸うときに、勝手に自分でくわえて火を点けてはいけません。必ず周りの中国人にすすめて、それから自分も吸う。次に吸うときも必ず相手にすすめてそれから自分も吸う。中国人もそうしてくれます。

一回すすめられて、「私、煙草吸いません」といっても、またしばらくするとすすめてくる。「しつこいな」などといってはいけません。「どうもありがとう。私は吸いませんよ」と目を合わせ、言葉を交わすことでコミュニケーションを深めるのです。

この、煙草をすすめるという風習は、今では宴会の場を出まして、ホテルのロビーであろうと、クルマのなかであろうと、歩いているときであろうと、とにかく中国人と一緒にいるときには自分が吸う時は相手にも煙草をすすめる、ということをやらないといけません。やるのが当然のところでやらないと、特別な意図をもってやらない、と取られてしまいますから、風習というものを軽く見てはいけません。

次にお酒ですが、これも大事なマナーがありますので気をつけなければなりません。

よくある例では、同じテーブルでこちらが４人、相手が４人いたとしますと、まず相手の４人の名前を必ず覚えておくことです。なぜ覚えておかなければならないかというと、「○○さん、乾杯しましょう」「○○さん乾杯しましょう」と宴会が終るまでに、少なくとも一人ずつ１周はしなければならないからです。２周、３周と多ければ多いほどいいのです。そのときに名前を知らないで、「ね、ね」とか、「おい、おい」というわけにはいきません。必ず「李部長」というように声をかけなければなりませんから、名前を覚えておく必要があります。

**「乾杯」「半杯」「随意」**

お酒の飲み方は、ご存知のように「乾杯」（カンペイ）といって全部空けるか、「半杯」（パンペイ）といって半分にするか、「随意」といって飲める人、飲めない人がいますので自分の好きなようにするかを取り決めておいて、それから乾杯をします。

特にお互いにこれから大事な実務責任者同士で仲良くやっていかなければならない、というようなときには、絶対相手から目をそらせてはいけません。「乾杯」と言ってじっと相手の目をみつめなければいけません。ところが日本企業の人たちは、これができる人が少ない。目をそらしたら、相手と仲良くしたくない、ということですから、駄目であります。なるべく大きく目を見開いて、必ずじっと相手を見つめる、これが礼儀です。

「飲めない人はどうしたらいいのですか」とよく聞かれますが、飲めない人の場合は、最初の一杯から「私は飲めません」といって、“随意”にしておけばいいのです。「２杯くらいはいけるだろう」と最初の二人だけ「乾杯」をして、次の人を半分にするとその人の

面子をつぶすことになりますから、これは絶対に駄目です。途中から変えるのは駄目で、飲めない人は最初から「私は飲めないのでこれだけにします」と言っていれば公平ですから間違いはないのです。

“相手を楽しませる、喜ばせる”のが礼儀ですから、最低限のマナーで必要なのは“相手の良いこと”、例えばお子さんが生れた、家を新築した、子供がどこかのいい学校に合格したというような話を聞いたら、即座に立ち上がって「皆さん、皆さん、李さんのところでは今度お子さんが生れたそうですよ。皆さんでお祝いしましょう」などと声をかけて、皆で立ち上がって乾杯をする。良いことを聞いたら「皆さんこのお家ではこんないいことがありましたよ。さあこれで乾杯しましょう」といってみんなに披露してあげる。これが中国での宴会での大事なマナーの一つです。だから中国人は何度も何度も立ち上がって乾杯します。「なんで中国人はあんなに何度も何度も立ち上がるのだろう」と思うでしょうが、それはそういう理由があるからです。

もう一つ大事なことは、招待された時でも、こちらが主催した時も、必ず宴たけなわのときに社長にひと回りまわってもらうことです。「社長、そろそろお願いします」といって出かけます。社長が行くとそのテーブルの中国人が皆立ち上がりますから、社長がひと言いったら通訳して、「皆さんよろしくお願いします」と挨拶をする。終ったら「社長、次のテーブルお願いします」「こちらのテーブルもお願いします」と、これはやらないといけません。

あと一つ二つ大事なことを話しますと、これは失敗した人数知れずですが、日本人は安易に「イエス」の返事をしますがこれは要注意です。この前のＡＰＥＣでの小泉首相と胡錦濤共産党総書記（国家主席）のやりとりもこれに類したものですが、「このプロジェクトをやりましょう」「ああ、いいですね。是非。」という前向きな話を日本人はよくします。日本的にはそういう場で持ちかけられると「ノー」であっても「ノー」とはいわない。お茶を濁した言い方、曖昧な言い方をします。「ああ、いいですな」くらいのことをいう。ところが、宴会の場で出した「ゴーサイン」は絶対守らなくてはならないのが、中国社会での大変厳しい礼儀であります。

私どもの大学も以前、それで失敗しました。「言っちゃだめですよ」と言っているのに、「貴大学でお金を出してくれれば、私どもは土地を提供しますから、うちの大学に寮をつくりませんか」といわれて、「ああ、いいですな」とつい言ってしまった。「いいですな」といっても、本人はＯＫしたつもりではなく、日本に帰ってもそのことをすっかり忘れていた。ところが半年ほどして図面が送られてきて、「はい、7,000 万円、いつ送ってやってくれますか」といってきた。それでびっくりしてしまって、「どうしよう」と相談にきた。「どうしようといったって駄目ですよ。言ってしまったんだから今さらどうにもなりません」と、えらいことになってしまったことがあります。

とにかく宴会の場で色よい返事をしたら守らないと、彼らは宴会の場は神聖な場だと思っていますから、守らないと「あいつは信義にもとる奴だ」とその会社自体が信用を失う

ことになります。日本の場合の「酒の席でいったことだから責任は問われない」というのとは、正反対であります。

もう一つ要注意は中国人を宴会に招きますと、よく前触れなしに自分の奥さんや友達を連れてきます。中国の宴会ではよくあることです。日本人は「冗談じゃないよ、一人いくらかかっていると思っているんだ。ずうずうしいにも程がある。自分の客ぐらい自分の金で払ったらどうだ」と思います。しかしこれは、先ほどお話したとおり人のつながりが財産であり、命でありますから、人を紹介するということはその人がもっている大変な人的ネットワークとインターネットさせてくれることで、大変なプレゼントであります。紹介してくれる人の面子もある。こちらを信用しているから紹介してくれる。従って、知らない人を連れてきたら、誰にも増して大切にもてなさなければなりません。中国人は「客を好む」（ハオクー）といいますけど、これは大事なモラルであって、一宿一飯の義理によって、例えばそれがシンガポールのお客さんであったら、次にわが社がシンガポールで商売するときに電話一本すれば、バーンとその人のマシンが動いて助けてくれる。これを粗末に扱ったらとんでもないことになってしまいます。こういうことが誤解を招いたり、また日本の企業が知らずに損していることにもなるのです。

こういうような中国社会の基本的な構造とそれに伴ったマナーは、ぜひとも知っておく必要があります。

## 4．中国人的論理と行動——日本人ビジネスマンの誤解を解く！

これは企業次元での話になりますが、ステレオタイプ（紋切り型の）の日本人経営者には中国に対する見方が固まっていて、一方的に中国を悪く思っている人が随分います。かといって、私は一方的に中国を弁護するつもりもありません。確かに随分ふざけた話もたくさんありますし、モラルハザード（倫理の欠如）もたくさんあります。社会のモラルが底抜けてしまって、いま中国はそのモラルを再構築するため必死になっていることも確かです。

昨年から今年にかけて中国全土で、小学校で授業の前に「四書五経」の素読が始まり、いま一千万人の子供たちがこれを始めています。人民大学という共産党の思想研究のメッカが北京にありますが、そこには孔子学部ができていて、最近では「国学」（1920 年頃に使われた言葉、儒家、法家などを含む）が復活し、これを勉強する学部ができています。また、北京語言大学には、毛沢東の像に代わって、孔子の像が立っています。

「人民日報」という共産党の機関紙を見ますと、「身体髪膚これを父母より受く。敢えて毀傷せざるは孝のはじめなり」という孝経の言葉が載っていました。本屋にいけば共産党のコーナーには“社会公徳”“職業道徳”“家庭美徳”という本がズラリと並んでいます。そういう教育をしなければならないくらい大変なモラルハザードがあることは確かですが、しかし、だからといってすべてがひどいわけではありません。日本人が中国人を誤解している側面もたくさんあります。

そこで、中国人には中国人のいろいろな考え方がある、という話を少しいたします。

**①中国人は勝手な理屈をこねる？**

日本人の多くは「中国人って勝手な理屈をこねる」と思っています。例えば、江沢民国家主席は2002年の党大会で胡錦濤に党総書記を譲りましたが、それ以前、江沢民は92年、97年、2002年の党大会で党方針を述べています。92年の党大会のときには保守派の人が「国有企業が70%になってしまった。30%も非国有企業がある。これでも社会主義経済か」と文句をいったら、江沢民は「いや、70%といえば過半数だ。過半数が国有企業なら立派に社会主義経済だ」と言いました。ところが、それから5年後の97年には国有企業が30%になり、半数を割ってしまいました。江沢民は何と言ったかというと「30%といってもエネルギーとか、金融とか、経済の心臓部はすべて国有企業だ。心臓が国有企業なら社会主義経済だ」とうまいことを言いました。

2002年になるとそれもいえなくなってきた。さあ、どうするかなと思っていたら、先手を打ってその2年前に、「3つ代表」といわれる彼の理論を述べています。「広範な人民の根本的利益に合致するものはすべて社会主義経済である」と言っています。どういうことかというと、例えば富士通が中国に進出したとする。これは私企業であります。しかし、そこでたくさんの中国の人民を雇用し、水や電気などの資源を有効に使い、つくった物が中国人民の生活の向上に役立っていれば、これはまさしく“広範な人民の根本的利益”に合致していることになります。「国有だろうが、私有だろうが、この考えに合っていれば社会主義経済だ」と、こういったのです。その結果、2002年の党大会では私有企業の経営者でもみな共産党員になれるようになり、無産階級政党ではなくなってしまいました。いま、中国の私企業経営者の3割は共産党員です。

日本だったら「あなた5年前何ていった？　10年前何ていった？　あまりに節操がないのではないか」というと思います。しかし、いま挙げたような例は江沢民に限らず、掃いて棄てるほど例があります。中国では「結果よければすべてよし」なのです。特に政治の場合は「人民の生活が向上するのであればすべてよし」です。「絆創膏と理屈はどこでもくっつく」のです。とにかく理屈が着けばいいのです。要は「生活が右肩上がりかどうか」が大事なのです。

例えば、会社が中国といろいろ交渉する場合でも、公の文書や会議の発言では絶対に原則を曲げてはいけません。だけども実際にものごとを進める場合は、いい意味での“フレキシビリティ”、率直に言えば、「換骨奪胎」「羊頭狗肉」は最大限許される、というのが、中国式の融通無碍であります。

このまえの「反日暴動」のときも、胡錦濤総書記にしても、温家宝首相にしても、公のところでは「日本が悪い。謝らない」といっています。日本はそこだけとらえて「けしからん！」といっていますが、中国式では「俺たちの面子を立てろよ」といっているのであって、一皮剥けば融通無碍であります。反日暴動があったその日のうちに温家宝が関係者を集め、翌日には会議をやって各大学に宣伝隊・説得隊を送って「日本と仲よくしなけれ

ばいけない」「そういうことをするな」と全部抑えにかかっているのです。上海辺りでも党幹部や政府幹部が各企業を回って「大丈夫です」「私たちは日本と運命をともにします」と言ったりしています。私どもの麗澤大学にも交流大学から「私どもは日中友好で頑張ります」というファックスが届きました。

表向きは面子でそうしておいて実際にはいくらでも譲歩する、これを私はよく「中国は薄皮饅頭だ」といっています。「表面をなめてごらん。ちっとも甘くないでしょう。だけど、薄皮をちょっとむいたら“甘い！”」、本当に甘いんですよ。いくらでも融通が利く。ですから、もう少し中国式との付き合い方をわきまえて、うまくやればいくらでもやりようはあります。そこがなかなかうまくいかないのが対中国の今の問題であります。

「実利主義」と「胡説八道」――「胡説八道」とは、口からでまかせを言う、ということです。これも中国の文化です。「でまかせを言うなんてひどい文化だな。それが中国４千年の文化か」と思うかもしれませんが、イギリス人のユーモアだって文化です。実は中国も論理学が非常に発達した国であります。古代ギリシャ、イオニアと同じように、春秋戦国時代に名家という一派がありました。公孫竜という人がおりまして、彼は「白馬は馬にあらず」という有名な言葉を残しています。その時代から中国では論理学が大変に発達していました。こういう中国人の論理好きというのは、司馬遷の「史記」にしても、「三国志」にしても、さまざまな歴史物のなかにたくさん出てきます。それこそ「笑点」の“座布団何枚”のような、たとえそれが屁理屈であっても、「うまい！」ということを言ったら、相手の国を滅ぼすのをやめてやる、奪った地を返してやる、命を助けてやるということをします。もし、その論理を解さないと、論理の素晴らしさを解さない“野暮”、文化的教養のない奴と見られてしまいます。こういう例は中国の歴史のなかではいくらでもあります。

現代中国でもそういった例はあります。私はいま現代中国のゼミをやっていますが、学生を毎年、必ず上野の寄席「鈴本」に連れて行きます。学生は「何で中国の現代の問題をやっているのに鈴本へ行くのですか」といいますが、「いや、鈴本に行って、あの面白さ、言葉の楽しさがわからないと、中国人を相手にできないよ。いくら学問、理論ばかりやってもだめだ。中国人と付き合うのだったらそういうセンスが必要だよ」と私は言って連れて行きます。とくに中国とタフなビジネス交渉をやるようなときには、そういうセンスが非常に重要になってきます。

有名な魏の曹操の話ですが、あるとき曹操が詩を褒めた言葉として、「黄絹幼婦」とあるのをどういう意味かと聞かれて、「ちょっと待て考えるから」といってしばらく考えてから「わかった」と言いました。「黄絹」というのは色の着いた糸、「糸」扁に「色」と書いて「絶」になります。「幼婦」は「少女」のことです。「女」扁に「少」と書けば「妙という字になります。合わせると「絶妙」となります。「素晴らしい。絶妙だ」と言わずに、「黄絹幼婦」といった、「何もそんなめんどうなことをいわなくてもいいではないか。はっきり“絶妙”と言えばいいではないか」と言いたくなりますが、それでは面白くないわけであります。　というように、中国人の論理好きというのをぜひぜひ知っておく必要がありま

す。

**②法律があてにならない？**

法律についてここで詳しくお話するつもりはありませんが、中国ビジネスをしておられる方には絶対必要な項目であります。

ＷＴＯに加盟してから中国はさまざまな法律を整備していますが、まだまだ整備されていないものがたくさんあります。例えばマンション取引がさかんに行われていながら、まだ物件取引に関する法律ができていません。昨年(2004)の暮から物権法の審議が始まって、今年(2005)６～７月に懸命に草案をつくって、その公聴会もいま開いております。フランチャイズとかチェーン店に関する法律は昨年(2004)暮にやっとできてきましたが、このような形でいまさまざまな分野で商売の仕方などの法整備を進めています。

ですから、ビジネスを進めるときに、直接関係する法律がいま一体どこまでできているのだろう、いつごろできるのだろう、いつごろ法律の網がかぶされるのだろうということはぜひ知っておかなければならないことです。

どうすればわかるかといえば、中国の新聞を見ますと、まず「国務院の何々に関する意見」というものが必ず出ていて、それから法律の試行があって、そのあと完全に法律が施行される、その次に親の法律を完全に運用するための実施細則ができてきて、罰則もできてきて、そこで初めて法律の網がかぶせられることになります。

このスパンが2001年前は一定しておりませんでしたが、最近はこれが３年くらいのスパンで進むようになってきました。環境汚染の取り締まり等については、この３年くらいでものすごい動きをしています。私はいま、どこの企業に行っても口を酸っぱくしていっているのは、「中国の環境汚染に対する法規の取り締まりはどんどん厳しくなっています。しかも前に遡ってやられます。中国政府は３年後、５年後、例えば2010年の数値目標をすでに出しているので、工場を操業するのであれば、いまから2010年頃の数値目標に合わせてやっておかないと、そのときになって『お前の工場、操業開始時に遡って自分で除去しろ』とやられますよ」ということです。すでにやられた企業もあります。

従って、こういう中国の法律の動きをしっかり追わなければいけないのです。それをなぜ「異文化コミュニケーション」のテーマに取り上げたかというと、日本ではあまりありませんが、中国では「試しに行う」つまり「試行」というプロセスが必ず入ってきます。広い国ですから、ある都市とか地域でまず試しにやってみる。それで経験をとって、完全な法律にして出すということをします。この『試行』のときからきちんと注意していないととんでもないことになりますよ、というのが私の言いたいところです。「自分のところはその試行地域に入っていない」と思っていても遡って適用されますので、ぜひぜひ気をつけていただきたいと思います。

**③中国人はすぐ手抜きをする？**

日本人の中国に対するよくある見方のひとつに、「中国人はすぐ手抜きをする」というのがあります。これは1980年代から90年代の初め頃、国有企業の親方日の丸に慣れた“ぐ

うたら労働者”を見てきたからです。「中国人はちょっと目を離すとすぐ手を抜く」と日本企業の人は思っています。若い人が入ってきてもやはり手を抜く。ますます「しょうがないな中国人は」という評価が充満しました。もちろん、そういう人も確かにいます。しかし日本人と大きく違うところは、中国人には「自分の能力をどう評価してもらおうか」という意識が非常に強くある点です。「どうやって自分が他人と違う能力があることを評価してもらおうか」。与えられたマニュアルどおりやって成果をあげても、他の人と差別化できませんから、まず、マニュアルをもらったらどこが省略できるかを考えます。省略して当初と同じ結果が出せれば、時間も費用も節約したことになりますから、これはみごとに合理化です。そういうことを必ず考えます。

これをいい方向にもっていくと素晴らしい結果が出るのではないか、とある日本企業の人が考えました。「中国人にはＱＣが向いているかもしれない」とＱＣ(quality control 品質管理、日本では1965年頃から「ＱＣサークル」という職場小集団活動を取り入れ自発的に品質改善を行っている)を持ち込んだところ、大変いい結果が出ました。驚いたことに中国での工場の不良品の発生率が日本の工場の 10 分の１くらいになってしまった例も出てきました。ですからすべてが悪いわけではなく、もっていきようがあるということです。

中国人は能力主義が大好きです。いま私が日本の企業の方々に口を酸っぱくして言っているのは「今までは日本式でもよかった。中国に工場をつくって、安い労働力を使って、安いものをつくって海外に売るだけでよかった。しかし昨年から今年(2004～2005)にかけて、10年かけた交通インフラがすべて出来上がってきました。鉄道、航空路、港湾、さらに全国津々浦々、新疆ウィグル地区、チベットの果てまで、すべての村に自動車道路が１本通り、すべての村に電気が通り、すべての村に光ケーブル通信ネットが通り（これを「村村通」といいます)、ほぼ完成したのが今年(2005)であります。それによって中国全土の物流がものすごい勢いで動き出しました。そのなかでこれからどうやって中国の国内の人を相手にビジネスをしていくかというと、労務管理、人事管理の面で前とは違う要素が必要になってきます。それは「能力主義でいかに評価するか」ということです。中国の能力主義は春秋戦国時代からの筋金入りです。秦の始皇帝がつくった「秦」という国は、陝西省の片田舎にあったときから始皇帝に至るまで、歴代の宰相はすべてよそ者です。国内から絶対登用しない。あの時代の思想家というものは孔子もそうですが、みな自分で諸国を歩いて自分を売り込んだ。食客３千人を抱える春秋の三君などはいわば「人材バンク」であります。どんどん人材を融通する。そういう歴史が紀元前からあるのです。ですから今の新聞をみても、大企業の社長であっても、政府の局長クラス、地方の局長クラスであってもみな公募しています。アルバイトで入った20代の若い女性が３年後には社長になってしまうとか、国有大企業の「ハイアール」でも、上海で一女性労働者がいい提案をして２～３年後には部長になってしまうように、年功序列、男女差別、ナショナリティによる差別はありません。ところが日本企業はまさにその正反対が多いので、これでは中国人は使えません。

**④給料が高いほうにすぐ転職する？**

いままでは日本流でもよかった。しかしこれからはそれでやったら皆逃げられてしまいます。そういう企業を腰掛けにして、どんどん優良企業に移っていってしまいます。「中国人はみな給料のいいところにばかり行ってしまう」といいますが、もちろんそういう人もいますが、これは“同じ仕事で、同じ評価であれば、給料のいいところの方がいい”ということです。

本当に自分の能力を育ててくれる、先を考えていてくれる、やりがいがある、評価制度がしっかりしているということであれば、必ずしも給料が高くなくても残ります。引き抜きの心配もありません。

つい先日も某有名自動車メーカーが私に、「近くの同じ自動車メーカーに30～40人ごっそり引き抜かれてしまった。中国人はすぐ給料の高い方へ行くから困る」というので、私ははっきりいいました。「失礼ですけど違いますよ。私はその話を知っています。30～40人抜かれたのは、あちらの会社は本人達の希望をよく聞いて、本人達が将来に向けて経理の勉強したい、と言えばそれについて将来計画を一緒に考えてあげている。そういうプランがあるから移ったのです。給料は同じですよ」といったのです。「おたくの会社は確かに給料は低くないかも知れないが、今のことしか考えていないでしょう。彼らの将来を育てることを考えていないでしょう。だから逃げられたのです」と言いましたら驚いていました。

**⑤おごってもらって「安いね」とは無礼なり！**

中国は商業民族であって、日本社会とは価値観がまったく違います。その一番大本の大事な話をこれからします。外交でも、小泉首相がこのことをちっともわかっていないから中国といまくいかないのです。これは何かというと中国は商業民族の国ですから、「値段」というものは売り手と買い手の意向が一致したときが物の適性な値段と考えます。従って常に値段交渉をして物の値段を決めていく。「定価」は本来ないのです。

例えば皆さんが中国人にご馳走したとしますと、中国人はたいがい聞きます。「いまのいくらでしたか？」、こちらが答えて「いくらだよ」というと、「へえー、安かったですね」という。これを聞いて、だいたいの日本人は頭にきます。企業の人はみな同じような経験を持っています。「中国人は失礼だよな。人におごらせておいて、値段聞いた途端に『安いなー！』はないだろう。なんと無礼な奴だ。二度とおごらない！」といいます。しかしこれは値段交渉の中国社会では、“よいものをいかに安い値段で手に入れたか”ということがその人の能力を判断する最大の物差しなのです。私がこれに注釈をつけますと「いまの店おいしかったな。あんなおいしいものがそんな安い値段なの？　あなたはえらい！　いい店知っている。目が高いね」という、これは最大の褒め言葉なのです。ところがこれでカチンと頭にきてしまう人が多い。

もう一つの例は「お客は渋い顔で送り出せ！」――これもそうであります。

もうだいぶ前に日本のデパートが最初に中国に進出したころに、本社の教育係の女性が

現地の従業員を集めて「お客様が帰るときにはニッコリ笑って、“ありがとうございました”と笑顔で送り出しなさい」と言ったら、「そんなことをしたら、明日から誰も来なくなりますよ」と言われたというのです。「じゃ、どうやって送り出すの？」と聞くと、「お客さんが帰るときは、渋い顔で反対の方を見るのです。そうしないと、明日からお客さんがきません」と言われました。「なんで？」とその教育係はびっくりしました。これは、値切って帰る客にしてみれば「今日はうまく値切った。儲けたぞ！」とホクホクして帰るのに、ぱっと振り返ったら店の人がこっちを向いてニタッと笑っていた。「やばい、まだ儲けていやがった。渋いなこの店は。もういやだ」と思います。しかし振り向いたら店の主人がしょげている。「ハッハ、俺にさんざん値切られて儲けがないからしょげている。またこの店に来よう」と思うわけであります。このように商売感覚が日本とはまったく違います。

何でも常に交渉ですから、お互いまず自分に一番有利な超極端なところにポジショニングして、一歩一歩お互いに譲歩して、落しどころを見つけるというのが中国式です。靖国神社の問題でも春暁ガス田の問題でも、中国はそういうものだと考えてやっています。ところが最初から、譲ることなど考えておらず、「俺のポジショニングはここ」と決めて一歩も動かない、梃子でも動かないというのが小泉さんのやり方です。中国から見ると、ハトに豆鉄砲です。「全然、交渉にならないや」というのです。日本からすると「中国はまったく受け入れられないような、何と言う勝手な極端なことを言うのだ」と思っています。それはそうですよ、最初は極端なところにポジショニングしないと交渉できませんから、自分に 100%有利なところにポジショニングします。日本のほうはそうではなくて、俺はこれしかない、一歩も譲歩できない、と最初に結論のところにポジショニングするからうまくいくはずがありません。これがいま一番大きな問題点であります。

**⑥契約を守らない!**

よく「中国人は契約を守らない」と言います。ここにも日本と中国の間の大きな深くて暗い河があります。中国人は契約を守らなくても爽やかな顔をして「守れませんでしたが頑張りました」という。「頑張りましたじゃないよ。守ってくれなきゃ困りますよ」と、これはどこの企業でも聞くことです。

確かに中国人にもずるして守らない人がたくさんいます。だけれども何割かの人はすごく真面目に、「やるだけのことはやった」と爽やかな顔をしています。

これはなぜかというと、中国人は“人からものを頼まれたのは、自分が見込まれて頼まれたのですから、出来そうもないことでもその場で「ノー」というのは大変失礼なことだ”と思っています。まず、頼まれたらやってみる、努力してみる。個人の間だったら「無理だ」と思っても、まず「やってみる」と言っておいて、1週間くらい経ってから「すみません、できませんでした」というのが礼儀です。

例えば日本の大企業が、あるとき中国の部品メーカーに「お宅の会社でいついつまでにこの部品できますか」と頼むと、「頑張ります」という。中国の会社は「あの会社から頼まれてしまったよ、これはえらいことだよ、できないけど“できない”とは言えない」。そこ

で「まあ“頑張ります”」と言っておいて、昼夜兼行頑張る。頑張ったが出来なかった、しかし誠意は尽くした。中国人の礼儀は「いかに相手に誠意を見せるか」です。そこが日本と違うところです。ですから、「頑張りました。でも出来ませんでした」でも誠意は尽くしたから、これで顔は立ったと思っています。

しかしこれでは国際社会では困ります。だからＷＴＯに加盟したときに、「人民日報」は記事を出して、「中国人的なそういうマナーは国際社会では通用しない。気をつけろ」というコーションを出しました。

日本企業が気をつけなければいけないのは、頼むときには本当にその企業がそれだけの能力があるかどうかを、しっかり自分の目で確かめることです。前もってそういうことをしなければいけません。

## 先にお礼か、後でお礼か

日本では「相手に心の負担を感じさせまい」とするのが礼儀です。だからお礼は後でする。先に物をあげると、相手を物でしばって負担をかけるので失礼になるから後から贈ります。

ところが中国人の場合は、「人にものを頼むのだったら、誠意を見せないでものを頼むのは失礼である、無礼である」と考えます。だからまず最初に相手に誠意を示して、物をあげたりご馳走したりして、それからものを頼む。ひとつ間違えば「ワル」になりますが、でも本来のまっとうな理由があるのです。「相手に誠意見せなければならない、それからものをお願いする」というのが礼儀です。

日本人も中国人も、お互いに相手を誤解しています。「日本人はずるい。相手がどれくらいやってくれたか見てから、お礼の額を考える」と私に言った中国人がいます。日本人では「中国人は油断がならない。うっかりご馳走になると後から頼みごとをしてくる。冗談じゃない、もう食べてしまった」と言った人がいますけども、どちらも相手を誤解しているのです。

## 「ちょっとそこまで」と「特意来了」

例えばよその家に行って「大変お世話になりました」とお中元でも持っていくと、日本では「わざわざ来てもらってすみませんね」と言われたときに、「いや、ちょっとそこまで用事があったのでついでに寄っただけです」という言い方をします。これは相手に心の負担をかけまいとする日本流です。

しかし中国人は違います。「わざわざ来てもらってすみませんね」というと、「はい、わざわざ来ました」という。「わざわざ来ました」とは恩着せがましいと日本人は思いますが、これは中国人の意味を汲まなければいけません。「それは山本さん、他の人だったらわざわざ玄関先まで来ませんよ。あなただから来たのです」とよいしょします。これも相手に対する誠意の示し方のひとつであります。

このように方向性が違いますので、気をつけなければいけないことが随分あります。

過去の戦争について「日本は謝罪した」「いや、謝罪していない」というのも、大きな異文化の違いであります。これは専門家がきちんとデータを取って調べていますが、「謝る」ということに関する、中国と日本の間に大変大きな差があることを示しています。

日本人の場合は、「謝る」ことによって罪が軽減される、ときにはちゃらになる、率直に謝れば赦されて逆に褒められることもある。だから日本の言葉には必ず「ちゃんと謝ったじゃないか、それなのに」という言葉があります。「謝ったのになぜ赦してくれないのだ」「何でそれを責めるんだ」という言い方です。日本人の感覚からすれば、歴代の総理大臣が謝罪している、これでもう充分ではないか、謝罪は済んでいると考えます。

ところが、中国社会では「謝る」ということは罪を認めることであって、「謝り」の終わりではなくて「謝り」のスタートであります。これは日本とは厳然と違います。謝ることによって自分の責任であることを認める、それに相当した賠償をする、命をもって償う、服役する、お金で償う、それを実際にやって謝りが完了するのです。これが日本と中国の一番大きな違いです。ですから日本の歴代の首相が謝っても、中国人はそれを“謝りの開始”ととらえます。実際にそれに対するどういう償いをするのか、そこが問題だと思っています。日本人は“謝りの完了”だととらえているのです。

本日は「異文化コンフリクト（衝突）」についていろいろお話しましたが、この他にも日本の人たちは中国についてあまりにも知らないことが多すぎます。７月７日の話もそうですが、中国の発展についても沿海地方のことだけで奥地のことを知りません。中国はいますごいスピードで変化していますので、いまの日本の一般人が知っているよりも何歩も先をいっています。一つの例をあげますと、あのタクラマカン砂漠にウルムチというところがありますが、皆さんもいっぺん行ってみていただきたいのですが、いま大変なことになっています。砂漠のへりにある都市がいまどうなっているか、私は自分で撮ってきた写真をよく企業の方に見せます。「これは上海か、日本のお台場か」と思うようなすごい高速道路、高層ビルが出来上がっています。どうしてそうなったかというと、中国から中央アジアを通ってカスピ海を抜けて、オランダへ抜ける「ユーラシアランドブリッジ」、これがどんどん動き出している、欧亜大陸の幹線道路です。カザフスタンは21世紀のエネルギー源といわれています。そこからも中国はどんどん石油・天然ガスを引き始めています。というわけで、中国の加速度的な変化に遅れないようにしなければいけません。

以上で私の話は終ります。駆け足でどうもすみませんでした。

ＮＨＫラジオ深夜便　「明日への言葉」
平成 25 年 1 月 17 日、午前 4：05～ＮＨＫラジオ第一放送

# 「中国文化の懸け橋となって」

麗澤大学教授　三潴（みつま）　正道（Ｓ42）

インタビューアー　ＮＨＫ　玉谷　邦博（Ｓ38）

三潴　正道（Ｓ42）1948（昭和 23）年生れ
東京外国語大学・大学院卒
現在、麗澤大学外国語学部　中国語教授

**玉谷**　三潴さんは中国語・中国文化の専門家でいらっしゃいますが、中国と関わるようになったきっかけは何だったのでしょうか。

**三潴**　吉川英二の翻訳した「三国志」とか「水滸伝」を小学生のころに読んでいて、血わき肉躍る思いでした。30～40 回読みました。ですから「水滸伝」の 108 人の英雄豪傑などは全部名前をそらんじていました。

**玉谷**　漢文そのものに、小さい時から接してきたとか？

**三潴**　それもあります。とにかく本を読むのが楽しみで、そんなにたくさん本を買えませんから、父の書斎から本を引っ張り出して、その中に漢文の書き下しもありましたので、自然に慣れてしまったということです。父は憲法学者でしたので、蔵書の中から読めそうなものを見つけて。

**玉谷**　それから中学、高校と進まれて、実は高校が私と同窓（戸山高校）なのですが。

**三潴**　先輩ですか。これはどうも。

**玉谷**　漢文の時間がありましたね。あだ名が「だいしぇん（大先生）」で、福島先生でした。私は漢文で苦労した方ですが、三潴さんはお手のものでしたでしょう。

**三潴**　お手のものかはどうかは知りませんが、他の科目よりはずいぶん楽でした。

**玉谷**　そして大学へ。

**三潴**　最初は千葉県柏市にある「麗澤大学」の中国語学科を卒業して、ご縁があって東京外国語大学の大学院に入りました。

**玉谷**　専攻は中国語？

**三潴**　そうです。現代中国語の大家・小清水先生、中国歴史語法の専門家でいらっしゃる金丸先生に教わることができました。こういう大先生に会うことができたのは幸せでした。

**玉谷**　その世界の権威の方々？

**三潴**　そうですね。小清水先生には現代中国語の語法に詳しく、金丸先生は中国の六朝、唐、宋、元、明の戯曲小説の語彙とか語法の研究をしておられました。金丸先生に出会えたことは、その後、中国文化を知る上で、私にとってものすごくプラスになりました。

**玉谷**　単に言葉だけの勉強ではなくて、文化を学んだと。

**三潴**　そうですね。特に戯曲となりますと、庶民のいろいろな感情、価値観といったものが含まれていますので、普通の歴史の教科書ではわからない中国の人々の感情や文化がわかる、これはとても役に立ちました。

**玉谷**　東京外語大の大学院で学んだことは、現代の中国を理解する上で役に立ったと。

**三潴**　それはもう大変に役に立ちました。最高レベルだと思います。ただその「論説体」といわれる中国の現代書き言葉については、日本の中高教育はこれまでまだまだ弱かった。その部分については時代的な背景もありました。

**玉谷**　それは日本語の場合でも言える、「書き言葉」と「話し言葉」のその差ですか。

**三潴**　そうです。戦前の書き言葉はいわゆる文語文のような、話し言葉とまったく違うものでしたから、これは「ジジュクン（？）」といって、その専門のジャンルがありまして、その研究もあったくらいですが、中国では1920～30年頃から「白亜運動」ということをやりまして、書き言葉をなるべく話し言葉に近づけようとしたのです。ところが、近づけたのですが、本当はずいぶん違うところがあるのです。話し言葉に近づけようとしたこと自体が逆に「論説体」を疎かにすることになって、いま、大変なツケが回ってきている状態です。つまり、そこの教育システムとか、カリキュラムがすっぽり抜けてしまっています。

**玉谷**　ツケが回ってきている？

**三潴**　私もいわゆる口頭語だけの教育を受けてきたものですから、後で大変に困りました。「これは何とかしなければいけない」という意識がその後ずーっとありました。

**玉谷**　そこで正しい方法をあみ出された？

**三潴**　どうやってそこを脱け出そうかと、つまり「論説体」が読めないと、新聞・雑誌はおろか学術論文も読めないばかりか、いま現在、インターネットで情報が収集できないのです。インターネットでキーワードを入れると、ポーンといろいろな資料が出てきます。でもそこに出てくる言葉は、完全な話し言葉ではない。「論説体」ですから。

**玉谷**　そして、これは三潴さんの長年にわたってのお仕事でもありますが、「いま、中国が面白い」という本を毎年定期的に刊行されておられます。翻訳する人がいて、それをいろいろまとめる立場ですね。これは共産党機関紙の「人民日報」の記事からピックアップしたものだそうですね。

**三潴**　そうです。1ヵ月あたり100本ほどいい記事を選んで、さらにその中から８本精選しまして、それが1年間12ヵ月ですから、ほぼ100本近くなります。それを訳した中からさらに60本に精選して、それを15章のテーマに分けて、現代中国を15の角度から見てもらおうというものです。

**玉谷**　なぜ、そのようなことを始められたのですか。

**三潴**　これは胡錦涛、温家宝政権ができた頃（2003 年）です。それまでも「人民日報」を追いかけていたのですが、その頃から「あれっ！」と思うような記事が出はじめました。「今までと違うぞ！」という印象があったのです。ご存じのとおり、「人民日報」は中国共産党の機関紙ですから共産党のプロパガンダが多いのですが、「こんなことまで書いていいの？」と思うような記事が出はじめたのです。

**山谷**　私たちのイメージでいきますと「人民日報」は政府の公式的な固い新聞ですが、そうでないものが三潴さんの目にとまった？

**三潴**　それが、最も強烈なのが党や政府の腐敗を暴く記事や、環境破壊に対する警鐘、さらには地方政府の暴走とか、それまではあり得なかった記事が次々と出てきました。「これは面白いな、なぜだろう」と思い、調べてみました。すると、二つのことがわかってきました。一つは当時、日本のメディアは、胡錦涛、温家宝政権はかなり開明的だと思っていたら、逆に言論弾圧を深めている、というような書き方をしていました。これだと、私の感覚と合わない。すると「なるほど」と思ったのは、その当時（2003 年）から 2005 年頃にかけて、環境破壊とか、地方政府の暴走とか、役人の腐敗が、もう自助努力とか内部規律では制御できなくなってきたのです。そこで、メディアの力を借りて何とかしようと考えたようです。しかし反中・反共的なメディアでは困る、そういうメディアからの批判は徹底的に取り締まる。一方、自分たちの持っている道具としての「人民日報」とか「中国声明報」には、今までは考えられないような幅広い権限を与えてこれをやらせる。もちろん、限度を越えると“バチン”とやられますが、びっくりするような記事が出てきました。「これを紹介しない手はない」と思いました。

**玉谷**　2007 年が 1 冊目でした。

**三潴**　そうですね。2005 年頃から中国では環境破壊が極点までいってしまいまして、2006 年ごろから「どうしようか」と必死になっていった時期でした。そのへんが私としても一つのきっかけとなって、それではやろうではないかと、2006 年の記述を集めて、2007 年に「いま、中国が面白い」という本の発行を始めたわけです。

**玉谷**　そして、去年 2012 年版、今年 2013 年版が出ました。通算６冊になりますか。新しいのを拝見すると、日本に関する論説が出ていますね。

**三潴**　第 1 章は、毎回、日中関係に向けています。

**玉谷**　温家宝さんが東日本大震災後の被災地を訪れたときのことが書いてあります。小学生との交流もありました。これを拝見すると、尖閣列島問題の少し前なのに「こんないい交流もあったのだ」という感じがしみじみするのですが。この６冊目が出て、この６年間を振り返って、三潴さん自身、どういう風にお考えでしょうか。

**三潴**　二つあると思います。一つは中国を一つの面から見るだけでは危険だということです。いま、政治面ではぎくしゃくしていますが、民間レベルではそれと関係なく、もっと理解し合って強化しようではないかということになっています。もう一つは、あまり芳しくない話ですが、「中国は面白い」と書いたのに、最近は「つまらなく」なってきているこ

とです。ちょうどこの１月に「南方週末」のことが出ていました。政権交代の時期でもあり、言論統制を厳しくしていますから、それが反映されてきているなという気がします。ただ、習近平政権がスタートして、そのあと 10 月後半あたりから、またかなり楽しい記事が出てきそうだなという気がしています。

**玉谷**　ニュースでも伝えられていますが「南方週末」ですか、こういう問題が起きているのかと思いましたけど、三潴さん、専門家の目からご覧になっていかがですか。

**三潴**　これは「南方週末」自体が以前からかなり先頭を行くような進歩的な運動をやっていますので、そういう意味では目の敵にされていたようなところがありあす。ただやはり、そういうことだけではなくて、中国の中で地方、特に「シャク」と言われている地域コミュニティも含めて、民間の人たちが自分たちの意見を主張しよう、声を反映させようという動きが強くなってきています。2008 年に「０８憲章」という、シシリン（？）たちが中心となって、共産党の一党独裁に対する転換を求めるような物議をかもした事件がありましたが、それに似たような声明が出されて、これをどう扱うのか大きな問題です。やはり、抑えれば抑えるほど内圧は高まるという、これをどこでどうソフトランディングさせるかというのは大変大きな問題です。

**玉谷**　さて、そういうシリーズを出すかたわら、三潴さんは「日中の異文化交流」という面にもいろいろな活動をなさっている。そもそも、この「異文化」とは何ですか。

**三潴**　皆さんも大体感覚としては察しておられると思いますが、やはり、中国でも、インドでも、日本でも、与えられた自然風土が全然違う。それによって何を生業（なりわい）にするか、漁業か、農業か、いろいろ違ってきます。そうすると、それに合わせた生産体制や社会制度ができてきます。それぞれがそれぞれの独自の生活をする。それを代々受け継いでいく、磨かれていく、そうしますとそこに違ったフルーツがなってくるのであって、我々はそれを「異文化」と呼んでいるわけです。食べ物だったら、カレーとか、餃子とか、お寿司を持ち出すまでもなく、我々を豊かにしてくれる多様性を与えてくれるものですから、本来は楽しいものであるはずですが、それがわかっていないと異文化に接した途端にまるでインベーダーに会ったみたいに、眉をしかめたり、むかついたりしてしまうというのが現実の世界ではよく起こります。これはすごく残念なことで、日中でもそういった側面でお互いの誤解が７～８割渦巻いています。それぐらい、同じ東アジアにいて、歴史の長い交流があっても違います。

**玉谷**　しかも「漢字」という同じ文字を使っていますね。ですから、何となくわかり合えるのではないかと思う気持ちも素朴にあるのですが、そうではない。

**三潴**　そうですね。例を挙げれば、「手紙」と書いて、中国では「トイレットペーパー」のことだよ、などと昔よく言われましたが、企業では「協議をする」というと、中国では「合意する」ことです。中国では「協議」は相談することではないのです。

**玉谷**　日本では合意に至るまでのプロセスが「協議」ですが。

**三潴**　中国ではそうではないのです。日本語で言う「就職」という字をそのまま書くと、

中国では「就任」を意味します。大学生が「僕、こんど、ＮＨＫに就職しました」というと、「お前なに、そんなに偉くなったの？部長になったの？社長になったの？」と思われます。こういうときには中国では、「あなたの言うのは“就業”だろう」と言われます。日本語で「夫婦」と書くと、中国では「ご夫妻」にあたるような丁寧な言い方です。「周恩来夫婦」というと日本では失礼な感じがしますが「いや、これが本来の中国の言い方」ということになってきます。そういう言葉の面からの誤解は、いろんなところから生じます。昔、日本のある新聞記者の方が、中国から「親探しに来る」と書いて顰蹙をかったことがあります。「探親」と書いたら、中国では「里帰り」のことです。

**玉谷**　三潴さんは、「異文化セミナー」で講師として呼ばれることも多いでしょうが「中国人の思考と行動を理解するために三つの要素がある」とおっしゃっているそうですが、どういうことですか。

**三潴**　いくつかの要素が絡み合って彼らの行動パターンや価値観ができているのであって、一つには歴史的な側面からくる特徴があります。中国の長い封建時代の中で、どのようにしてのし上がっていくか、社会で浮かび上がっていくか、権力者に対してどう立ち向かうか、どう防禦するかということが非常に大きな問題で、中国では家族の命がけの助け合いがあります。中国では「自己人（ツーチーエン）」と書きますが、そういう絆を重んじていくという価値観を集約させるという側面があります。

二つ目の要素は「商業民族」という側面があります。すべてがそうだとはいいませんが、考え方、行動のほとんどが「商業民族」というコンセプトから理解できるところがあります。

三つ目は、礼儀の重点の違いです。日本人は他人に迷惑をかけない、負担をかけないというところに礼儀の基本があります。中国人は「私があなたに対してどれだけ誠意を尽くしているか、それをあなたに知ってもらおう」というところに礼儀の基本があります。これはまったくお互いに理解しにくいところです。

**玉谷**　具体的な行動に出ると「あれっ！」ということになるのですね。

**三潴**　そです。中国人が「私はあなたにこんなに誠意をもっていますよ」と近づいてくると、日本人は「それ以上近づかないでよ」と引きます。ところが、中国人から見ればそれが当たり前ですから、日本人が距離をおいたまま、顔は笑っていても手を差し延べるくらいだと「何か、あいつは冷たいな」と思います。そこがもう誤解のスタートです。

**玉谷**　初対面のときも、中国人は相手のことをできるだけ知りたいと。

**三潴**　そうですね。これも大きな誤解ですね。北京オリンピックの直前に「人民日報」の一面に、国民に対して“コーション”が載りました。「北京オリンピックが始まると、外国人がたくさん来ます。我々中国人は初対面の人に“給料はいくらもらっているの？”“クルマは何乗っているの？”とねほりはほりいろいろ聞きます。これは、“私はあなたを認める、あなたは付き合う価値のある人だ”と誠意を尽くしていることです。ところが、外国人は最初からそういうことを聞かれたら引きます。それが外国人だ。だから、“最初から根掘り

葉掘り聞くな"」ということが記事として載りました。

もう一つ、例を挙げれば、「タバコ」ですね。日本企業のほとんどの人は知りません。隣に中国人がいるのに、タバコを吸ったり、アメをなめたりすると、これは相手に対するものすごい侮辱です。「お前は眼中にないよ」ということですから。「人間関係を求めない。だからお前にタバコなんか奨めない。お前にはそんな価値はない」ということです。だから相手に必ず奨めなければいけない。

**玉谷**　それから、日本では人から物をもらうと、間をおかずにお返しをするということをしますが、中国人はそうではない？

**三潴**　そうですね。全部が全部ではなく、地域差があります。北京とか天津など華北では優勢な習慣ですが、そういうところがあります。私の知っているある中年の婦人が日本の団地に引っ越してきて、まわりに中国から持ってきた月餅を配ったら、みんなから拒否されたといって泣いていました。「どうしたの」といってよく聞いたら、彼女が月餅をあげたまわりの人達が、お返しといって果物などいろいろ持ってきました。彼女にしてみれば、「自分が月餅という形で誠意をあげたのに、バナナという形で送り返された。あなたとはつきあいたくないよ」と受け取って彼女は落ち込んだのです。そういう卑近なところから誤解を解かないと、いろいろ衝突が始まります。

**玉谷**　これが中国に進出する企業とか、それをバックアップする官庁になると、三潴さんから見ると中国理解がもう一つ弱いという面があると。

**三潴**　ありますね。例えば日本のいろんな企業で私がアンケートをよくとりますが、出てくる例の一つが「中国人はミスをしても謝らない」「私ではないと言い張る」「中国人は何てモラルが低いのだろう」と言った感想です。これはずいぶん大きな違いがあって、実は「中国人と日本人の謝り構造の違い」ということを、ある研究者が論文を書いていますが、一番大きな違いは、日本人は「それは私がやりました」と言うと、"謝りの終了"の合図ととらえる。ところが中国人はそれを"謝りの開始"の合図ととらえる。どちらも９割以上がそうです。日本人は、謝ればチャラにしてくれるか、悪くても半減ぐらいにペナルティが減ると思っています。ところが中国人の場合は「誤りを認めたということは、ペナルティを甘んじて受け入れます」ということなのです。そうしないと償いにならない。これが、尖閣列島で中国の漁船の船長が日本の警備艇に体当りしましたが、この時にその違いがもろに出てきました。日本は日中友好のことを考えて船長を釈放しました。しかし中国政府は国民にそうは説明しません。「日本側が逮捕したことが間違っていたと認めて釈放した」ということになります。そうすると、日本はこれで終わったと思っても、中国側は賠償を求めなかったら謝りが完了しないと思っていますから、翌日、中国政府は日本に賠償を請求してきました。日本のほとんどの人が怒りました。「こっちが譲ってやったのに、謝るどころか、賠償まで請求してくるとは何事だ。いい加減にしろ」と。その翌日にこんどは「我々は賠償を要求する権利がある」と言ってきました。"権利がある"ということは、「今すぐではなく、100 年棚上げにしてもいいよ」ということなのですね。その辺に、今の問題が如

実に反映されていると思います。

**玉谷**　なかなかこれは、溝の深い問題ですね。言葉の問題にまた戻りますが、中国に進出しようとする企業や官庁は、現代中国語が読めないと決定的な弱みになってしまいますね。

**三潴**　率直に言うと、日本を代表するような大企業、中国での売上が実績の半分以上を占めているような大企業でも、必要な部署にきちんと中国語が読める人が配置されているかというと、非常にお寒い限りです。それを多くの場合、中国人に頼ります。しかし中国人に頼るということは、自分たちで自分たちに必要な情報を差別化して取るということができないということになります。中国人は、悪気がなくても、自分たちが見て必要か必要でないか、そこで判断してしまいます。要するに差別化ができません。やはり、日本人の目から見て、中国人には気がつかないけれども「こんなところに面白いニュースがあるではないか」ということがあって初めて勝負ができる、それをボロボロ逃してしまっているという側面があります。

**玉谷**　そこに、三潴さんたちがやっていらっしゃるビジネス中国語の必要性がある。

**三潴**　ビジネス中国語のシステムをつくっていかなければいけません。どこに今まで問題があったのかというと、多くの企業が社内で中国語研修というものを初級からやっていますが、問題はそこから先です。日本でもビジネス関係の教材はたくさん出ています。中国でも「・・・・？」といって出ていますが、新聞やインターネットを見てわかるようにするには、その前にベーシックな部分での“論説体”と“会話体”の違い、そこのところの教育がすっぽり落ちてしまっています。そこを経て、経済用語とか、産業、法律文書に行かなければいけないのに。みんなそこの崖を飛び越えられずにダウンしてしまうということの繰り返しです。

**玉谷**　そこを何とか崖に落ちないようにしようと。

**三潴**　そうですね。そこを丸木橋ではなくて、もっとしっかりした橋を渡してあげようと。ビジネス中国語の“論説体”の教材、カリキュラムをきちんとつくって、その上にピラミッドを構築していって、本当に企業に役に立つ人材を育てていこうと思っています。

**玉谷**　民間レベルの交流をもっと進めたいということですね。どうも今日はありがとうございました。

＜四中先輩インタビュー＞

# 世の中に出てから役立った四中教育

重松　高明氏（S18）

◆平成18(2006)年5月6日
◆市川市男女共同参画センターにてインタビュー

＜重松高明氏略歴＞

大正14（1925）年　東京府牛込区加賀町２丁目に生れる
昭和11(1936)年８月　東京から逗子に転居
昭和13(1938)年３月　逗子小学校卒業
同　　年４月　府立第四中学校入学
昭和18(1943)年３月　同　卒業
昭和20(1945)年９月　横浜高等工業学校（現・横浜国立大学工学部）卒業
昭和21(1946)年５月　東京工業大学入学
昭和24(1949)年　同　卒業
三井化学工業入社　大牟田に赴任
昭和44(1969)年　三井アルミニウム工業に入社
４～５年ブラジル勤務
昭和61(1986)年　同社　退職

重松高明氏

## １．四中時代の思い出

私の四中時代は戦前のことで、今に比べ良い面と悪い面の両方があった。

入学したころはまだ食糧もあった。しかしそろそろ厳しくなってきて、運動靴がゴム製からサメの皮製に変わった。「サメの皮で運動できるのかい」と言った覚えがある。

学校の成績は上がったり下がったりで、平均すると中の中というところか。成績でクラス分けされ、A・Bが上位クラス、C・D・Eが中以下のクラス。私はAに入ったことはない。

### 四中のしつけ教育

四中に入って驚いたのは、成績よりも「操行（そうこう）」が厳しかったことだ。忘れ物をすると「遺忘（いぼう）」といって厳しく注意される。「遺忘」を３回繰り返すと「操行」

が「乙」になる。今だから笑って話せるが、当時は真剣で「しまった！」と思ってもどうしようもなかった。たぶん、物事をはじめる前にはしっかり準備せよということだったのだろう。それが習慣化され、世の中に出てからも役に立った。

校則に「卑史（ひし）・小説を読むべからず」というのがあった。卑史は卑しい読み物、小説は今と若干意味が違って「大したことのない読み物」というような意味だったろう。

映画館にはもちろん入ることは許されない。制服を着たまま入って補導教官に見つかると学校に連絡が行き、油をしぼられる。四中の制服には袖口に白線が入っていたから、見つからないように袖口をまくって入ったものだ。

もう一つは、行きと帰りではカバンの掛け方を左右変えさせられたことだ。ちょうど発育盛りだったので片方だけでは背骨が曲がるということだった。

服装についても厳しかった。ポケットに手を突っ込んで歩かないよう、ズボンにも上着にもポケットがなかった。

遅刻にも厳しかった。市ヶ谷駅から四中へ向かう佐内坂という急勾配があって、遅刻しそうになると懸命にかけ登ったものだ。

**遠距離通学**

小学校５年のときに家は逗子に引っ越したので、四中は最初から最後まで逗子からの通学だった。遠距離通学のはしりで、家から学校まで横須賀線・中央線で１時間半。電車の中はだいたい予習・復習で過ごした。宿題があるのでそれくらいにしないと追いつかなかった。他の人は家に帰って勉強していると思うと負けてはいられなかった。

今は千葉から直通運転している横須賀線も、当時は東京始発で、めずらしく２等車（今のグリーン車）を連結していた。当時の省線（鉄道省線）電車で２等車を連結していたのは横須賀線だけだった。横須賀の海軍士官の利用が多かったからしい。鎌倉、逗子あたりから乗ってくる生徒はさすがに少なく、四中に通う者は最初は私一人だった。しかし女学生は何人かいた。市ヶ谷に三輪田、四谷に女子学院、飯田橋には白百合があり、新橋には山脇があった。そのへんのお嬢さん方が乗ってきたので結構楽しかった。

夏季は授業が繰り上げになり、始業が午前７時。これに間に合わせるため４時過ぎに起き、逗子駅を５時４分の電車に乗らなければならなかった。これを５年間続けた。私より母がまいっていた。そのかわり、夏季の授業はお昼に終るのでありがたかった。

我々は昭和 18 年卒だから、戦中とはいえ授業は最後まできちんとあった。

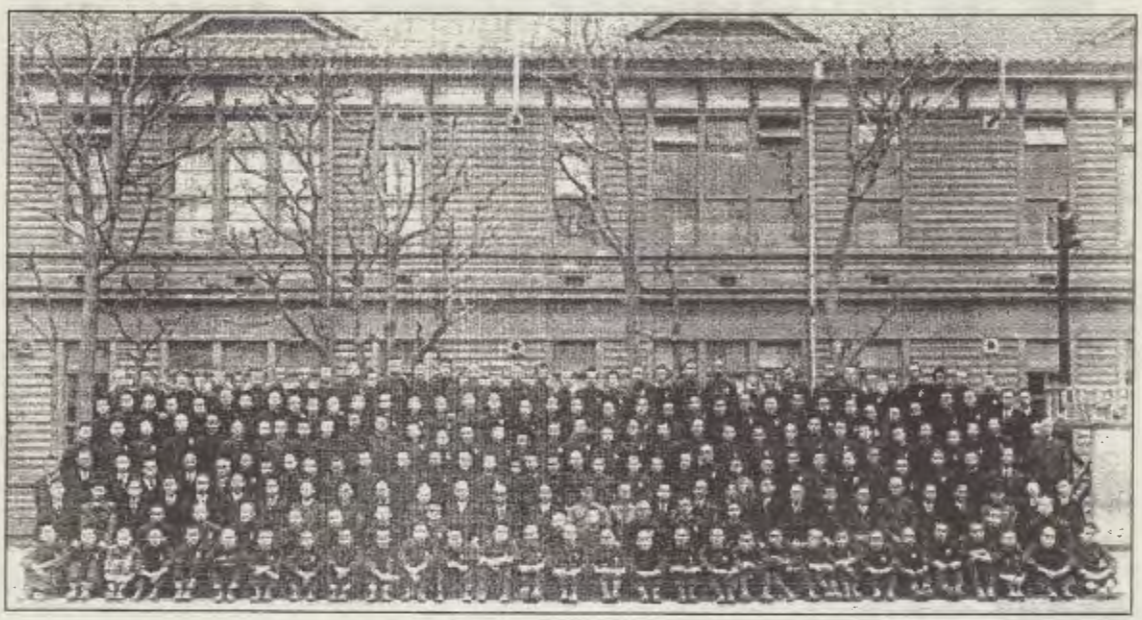
四中に入ったのは母親のすすめだった。市ヶ谷小学校に５年までいたので、進学といえば四中という意識があったのだろう。当時、神奈川県からも四中が受けられた。学区制がなかったのだろう。

逗子で皆が目指したのは藤沢の湘南中学、横浜の神中だった。

我々が四中に在学中に東京府から東京都に変った。だから入学するときは府立四中で、卒業するときは都立四中だった。電車やバスも府電・府バスから都電・都バスに変った。

神楽坂に「白十字」という大きな喫茶店があり、学校の帰りにそこへよく行った。本当はいけないのだが、４～５人でコーヒーとケーキを食べたのが楽しかった。

**当時の写真**



**都立四中　第 50 回卒業生（昭和 18 年３月）**

卒業写真は同学年 250 人くらいいたが、クラス分けされていないので、小さくて私なんかどこにいるのかさっぱりわからない。それ一枚で卒業だった。写真のバックになっているのが当時の主校舎で、その奥にプールをはさんでもう１棟あった。その左は講堂で、祝祭日の式典や校長の修身の講義が行われた。右の方が雨天体操場になっていた。

**深井校長の銅像の前で**

**深井家の人たちと共に（左からご母堂重松氏、妹・佳子さん、弟・信夫さん）**

同級の深井三郎は深井鑑一郎校長の外孫にあたる。彼には姉・妹がいて、家庭同士の付き合いがあった。我々の２、３年頃まではまだ深井校長で、修身などは深井校長自身が直

接授業を行っていた。

寮 佐吉先生

当時の深井三郎氏

当時の重松高明氏

同窓・寮甦三郎のお父さんが寮佐吉先生（英語）で、四中のすぐそばに住んでおられた。

**名物先生**

後に会社勤めするようになってから、“あの齢で叩き込まれたことはよく覚えている”という実感があった。特に英語は鍛えられた。戦時中であっても、英語の授業はばっちりやられた。そのお陰で、会社に入ってからも特に勉強しなくても何とか使い物になった。そのお陰で、他の外国語、ポルトガル語やフランス語など、仕事で外国に行くようになってからも割にスムーズに入れた。あの年頃に頭にきちんと叩き込むのは大変いいことだと思う。もちろん、自発的な学習もあるが、やはり強制的に勉強させられたために頭にきちんと入っている。

英作文の先生は「ブルサギ」の藤村先生だった。厳しい先生だった。

英語では「ゲーテ」の飯島先生がいた。英国紳士風で格調高かった。

我々1 年のときは若い福井先生がいた。オールバックのスマートな先生だった。あだ名は流線形。

漢文の先生は佐藤貫一先生、通称「カニ」だった。当時の漢文がいまだに役立つ。

数学は三浦龜吉先生、通称「スッポン」。喰いついたら放さない。怖かった。３年のときに、先生が黒板に向かっているときに、私めがけて消しゴムを投げつけた者がいた。投げ返した途端にさっと後ろを向いて、ばれてしまった。職員室に何時間か立たされ、あげくの果ては父兄が呼び出された。

松原道男先生、「お茶」に代数を習った。

柴田治先生、「ガンマー」には幾何を習った。幾何のお陰で、物の考え方の順序がわかったように思う。

近藤薫明先生には歴史を習ったが、授業に入る前に座禅を組まされた。もちろん、椅子に座ったままだが、呼吸を整えて、落ち着かせてから授業に入った。そういう変った先生もいた。

**那須修養道場**

那須に修養道場というのがあって、年に一回、そこで鍛えられた。夜、食事のあとに座禅を組んだり、朝は早く起こされて、道場の前を流れている那珂川で、寒い冬でも禊（みそぎ）と称して水に入り身を清めた。昼間は農作業。

お腹が空いて、食事時間になるのが待ち遠しかった。

那須修養道場に神社があって、朝、その前で祝詞（のりと）をあげた。そのため、祝詞をそらんじてしまった者もいた。深井校長か、近藤薫明先生あたりの発案かもしれない。

那須修養道場での農作業風景。遠くに見えるのは東北本線黒磯の鉄橋

**運動部**

運動はバレー、バスケット程度で、野球はなかった。

バレーは強かった。

籠球（バスケットボール）

**軍事教練**

小樽高商出の若手の中尉が来ていた。あとは年配の大佐だった。若い方は配属将校と称して元気がよかった。

あの頃、私も単純だったのか、翌日、習志野に訓練に行くために三八銃を自宅に持って帰ることが許されて、それがカッコよかった。軍人にあこがれている部分が相当にあった。

教練風景

**漢文の授業**

漢文もしっかり仕込まれた。４年になると「時文（じぶん）」といって、現代中国語までやった。

漢文は「白文」という“返り点”“送りガナ”なしの文章を家で墨で書き写して、授業ではそれを読まされた。これは大変だった。十八史略では昔の言い習わした熟語などよく覚えた。今思えばもっと覚えておけばよかった。「赤壁の賦」とか、刺客となり秦の始皇帝を刺そうとして失敗し、易水（えきすい）で自殺する壮士荊軻（そうしけいか）の「風蕭蕭として易水寒し、壮士一たび去ってまた還らず」などを愛唱した。

いま、「小説・十八史略」が出ているが、日本の文化のバックグラウンドにはそういう昔の漢文に由来するものが相当に深く染み込んでいると思う。

深井鑑一郎先生は漢学者だったから、論語・孟子も教えられた。これが役立ったが、あまり君に忠、親に孝ではなかった。

## ２．進　学

四中在学中に海軍兵学校を２回（４年生、５年生）受験したが受からなかった。

両親が松山出身だったので松山高等学校も受験したが、こちらも受からなかった。

受かったのは横浜高等工業学校で、その後さらに東京工業大学に進んだ。

第１希望は海軍兵学校だった。何としても海軍の将校になりたかった。海兵は旧制中学では４年から受験できた。受かれば５年を飛ばして入れた。結果は受からなかった。

当時、四中からは陸軍士官学校と海軍兵学校を受験する者が多かった。海兵の方がいくらか多かったのではないか。陸軍予科士官学校は現在、防衛庁のあるところで、四中から近かった。夕方になるとラッパの音が聞こえてきた。

私もある時期までは軍国少年だった。戦争の途中から“これは怪しいな”という実感はあったが、表面に出すことはできなかった。

両親は息子が軍人につながる学校を受験することには躊躇していたらしくて、落ちたら喜んでいたように思われる。

我々が４年生のときが昭和 17 年、５年生のときが昭和 18 年（山本五十六が戦死した年）だから、大体、先行きは怪しいということはわかっていた。しかし当時は「戦争に勝たなければならない」という緊張した空気だったので、我々も半分くらいは真に受けていた。戦況にかかわらずあまり意識は変らなかった。

前述のとおり遠距離通学で、横浜から通学していた清水晃（あきら）という友人がいた。私は「お前も海兵を受けないか」と誘って、４年のときに一緒に受験したが、二人とも落ちた。しかし彼は後に補欠で合格して４年修了で海兵に行った。夏休みに彼は真っ白な軍服でやってきた。まぶしいほど美しくて、それを見てどれほど羨ましく思ったことか。しかし昭和 20 年の夏に千葉の上空で、Ｂ２９と交戦し亡くなった。冥福を祈るや切である。

## 3．化学工業の道へ

### 就職そしてブラジル赴任

四中時代、海軍にあこがれた私だったが、昭和24年に東京工業大学卒業後は三井化学工業に就職して、人生の大半を“化け学屋”で過ごすことになる。

前半の三井化学で九州に15年いた。後半はアルミの方で20年。

私はアルミニュウムの企業化を担当していたが、ある程度目途がついたところで、アルミニュウムの精錬をする方の会社に進んだ。三井の物産、鉱山、金属、化学、銀行が出資して、新しくアルミ工業という会社をつくったが、昭和44(1969)年、私はそちらに移った。

国の海外アルミプロジェクトは製錬5社が順次、三菱がオーストラリヤ、住友がインドネシヤというように回り持ちで受け、三井はブラジルを受け持った。昭和50(1975)年頃から3年間、私はブラジルに行った。

昭和61(1986)年に退職して、その後、もう一度出て来いというので1993～95年の2年間、またブラジルに行った。前回と合わせると5年間ブラジルにいたことになる。

ブラジルは鉄鉱石も出るが、アルミの原料になるボーキサイトも品質の良いものが大量に出る。まずアルミナという酸化物にして、それを電気分解して精錬する。できあがったアルミは、日本とブラジルの出資比率に応じて配分する。出資比率はブラジルが51%、日本が49%。

精錬はすべてブラジルで行うが、その技術を軌道に乗せるまで我々が現地で指導した。プロジェクトは金が続いたり続かなかったりしたので、結局10年くらいかかった。

アルミの精錬には大量の電力を使用するが、アマゾン河は3,000kmの上流にいっても水位差が 100mくらいしかないといわれ発電できない。その支流に割と大きな川があって高低差もあり、そこで水力発電をし、その電力を使用した。発電設備はフランスが担当した。そこから200kmくらい送電線で引いてきて、アマゾン河の河口に近いベレンという都市の近くに工場を建てて、そこで精錬を行っている。数日前の日経新聞では、その工場規模をさらに拡張するという記事が載っていた。これができればアルミナに関しては世界最大規模の年産600万トンになる。

そのアルミナを使って、我々は精錬を行っており、豊富な天然資源を有効に利用し、付加価値を付けて利潤を得、ブラジルにとっても国益につながるプロジェクトになっている。

### ブラジルでの生活

ブラジルはポルトガル語で、アシスタントもいなかったので自分で言葉も努力して意志疎通をはかった。四中での英語の鍛錬のお陰もあって、やってみると何とかなるものだ。

ブラジルには日系人が多いが、会社でも多かった。日系人のお嬢さんにはびっくりするような優秀な人がいた。親の代に入植して生活は厳しかったせいか、体はひ弱そうに見えたが、頭の働きは抜群だった。

ブラジルは白人と黒人の混血や、白人とインディオの混血などが多く、多民族国家であ

る。私の孫娘も実は混血だ。最初にブラジルにいったときに娘を連れて行って、日本人学校の先生の手伝いをさせていたが、ポルトガル系の男性と仲良くなって、日本に帰ってきたら孫娘が一人できていた。3～4才の頃はとても可愛かった。いまは23～24才になって、建築を勉強している。

日本からのブラジル移民は戦前からあり、「笠戸丸」が第一陣だ。NHKで「ハルコとナツコ」という番組があったが、あのようにみな苦労をされたようだ。

戦後の移民は昭和30年代で、この人たちはアマゾン河口に近いベレンに入植して、そこでピメンタ（辛子）を栽培して成功した。世界のピメンタの相当な部分を輸出している。しかし集約農業で単一栽培していると作物に病気が発生する。私が行った頃は作付け面積を制限するなどの対策を講じていた。

ブラジルは本質的に移民の国だ。16世紀前半にポルトガル人が入ってきて原住民を制圧し、コーヒーや砂糖黍などのプランテーションのために原住民を奴隷化したり、アフリカから黒人を輸入したりしたが、割と早い時期に奴隷解放を行っている。その後、イタリア、スペインからも入ってきて、原住民のインディオや黒人との混血が進み、さまざまな人種が入り混じっている。

今日のTVニュースでは、中川農林大臣がブラジルを訪れて、「砂糖黍でアルコールをつくろう」という話をブラジルの農業大臣としていた。ブラジルではアルコール車が普及している。アルコールは燃焼したあと排ガスの有害成分が少ない。アルコール車が走ったあとは、ウイスキーのようないい匂いがする。問題は、ガソリンは水と混ざらないが、アルコールは水と混ざるため、水増しした不良燃料が出回ることだそうだ。あまり水増しするとクルマは動かなくなる。

海外経験で生活観が変ったかといわれるとそれほどでもない。ただ、千葉に越してきて、またどこかに移れといわれても、あまり苦にならなくなったことはある。遠いといえばブラジルまで行ってきたので、それを思えばどこであろうと抵抗感はあまりない。

今は娘や娘婿が遠くにいてもメールで頻繁にコミュニケーションできるので、昔のように長々とした手紙を書くようなことはしない。気心の知れない外国人もいるが、私の娘婿の場合は割に日本人的感覚のある人なので気さくに付き合っている。

確かに日本と外国では生活習慣の違いで行き違いはある。それは私も娘も感じている。例えば、子供のしつけが違う。子供は大体母親になつくので、言葉も母親の日本語を主に話すが、それが亭主にとってはあまり面白くないらしい。しかし今アメリカに行っているので、ブラジル語はあまり話さず、英語で話すことが多い。それでも父親からすると、もう少し父親に敬意を払ってポルトガル語を話して欲しいという気持ちはあるようだ。

孫娘は英語には堪能、ポルトガル語は少し、日本語はかなり話せるが漢字になるとおぼつかない。「この漢字、何て読むの？」とときどき聞いてくる。日本の若い女性に比べると国語力は落ちる。仮名は書ける。漢字も書けるが、書き順が違ったりする。

国際的に親が違うという場合に心配なのは、どこの国の人かわからないような、アイデ

ンティティのない子供が育ってしまう可能性があるといわれるが、これはある程度止むを得ない。プラス面があればマイナス面も出てくる。マイナスにこだわらず、プラスを伸ばしてやることだ。

外国語というものは、若いうちにやらないと効率が悪い。修得能力は10代の後半を「1」とすると、30代で約半分、40代になるとその半分、50代になるとさらにその半分。60代ではその半分で、リタイア後では10代の「16分の1」になる。そんな感じだ。

## 4．近況報告

銅版画をやったり、昆虫の模型をつくったりして余暇を楽しんでいる。

蝶は和紙に版画で模様を刷って、
手彩色で色をつけ、胴体、足、
触覚をつけて完成させる

昆虫模型。アリはドングリに
針金で足をつけ黒塗装。
ゴキブリは胴、足をつくり、
羽は紙に光沢を出す液を塗る

＜投稿原稿＞

# リスボンの昼寝

永野　康雄（S31）

五月の連休を挟んで、三週間ほどモーツアルトの音楽を聴きに、友人たちと、まだ寒さの残るオーストリア、ドイツを回ったが、その間、息抜きにポルトガルの首都リスボンを訪ねた。同行は妻のほか二人の友人。空は真っ青、爽やかな風の心地よいリスボンに着くと、背筋もピンとした。町の正式な玄関は海に面した宮殿だったのだろう。広場や寺院が海岸地区から内へと展開している。坂道が多い、小高い丘の上にはかつてこの町を守った城塞が残っている、急坂を路面電車が上下する、真っ赤な長いつり橋が対岸へと伸びている。どことなく、アメリカ西海岸のサンフランシスコを思い浮かべるが、新大陸の街づくりをした人々は、リスボンをイメージしていたのかもしれない。
五日間過ごしたホテル・アヴェニーダ・パレスは町の中心に近いが静かで落ち着く。のんびりとしたボーイたちのペースが一呼吸ずれていてこちらもゆったりしてくる。

海岸にあるセンター広場から、メインストリートを一直線に坂を上り詰めると、公園のなかに「イレブン」という飛び切り上等なレストランがある。友人が探してくれ店だ。夕食に出かけると、町並みと港が一望できる窓際のテーブルに案内された。モダンですっきりとしたフレンチレストランだ。ワインリストは、地場のワインがたくさん出ている。とにかく、ドンペリニョンで乾杯だ。四人がそれぞれ美味しそうなメニューを選ぶ。メニューにない、つきだしが運ばれてきた。一目見るだけで、これはいけそうだと思う。四角い真っ白な皿、細い縁取りはこげ茶色、白黒二色の陶製の匙が四つ、丸い一口サイズのパイが二つ盛り付けてある。白い匙には、トマトの赤とバジルソースの緑、黒の匙にはクリーム色のソースと細いディルが一筋、黄色のパイとのコントラストが美しい。どれにしようかと取り分ける、うまい、控えめな味つけ、香り、舌触りも、材料も良い。オペラの序曲みたいなもので、これからが楽しみだ。実際、料理の幕があがると、前菜のスープやカルパッチョ、フォアグラ、ラムや牛肉、鳥、鯛や貝類の魚料理、どれをとっても、まず盛り付けのセンスに感心する。デザイン、色合い、立体感･･･相当なシェフに違いない。ワインはデュオロの赤をソムリエの勧めで選ぶが、これもぴたりと決まる。皆さん、デザートにも感激していたが、わたしはポルトワインで仕上げた。ひとつひとつの料理だけではなく、前菜とメイン、デザートへの流れ、バランス、サービスのタイミング、どれも云うことなし。話も弾んであっという間に四時間ほどの至福のときが経ってしまった。

さて、次は、下町へ出てファドを聴こうとタクシーに乗る。そこへ、イレブンから電話が入り、私がクレジットカードを置き忘れたことがわかったが、もう引き返すのも面倒だから明日受け取りに行くと伝えた。あの店なら信用できると思った。
初めて聴いたファドは、どこか寂しげで、生活の匂いがするような、懐かしいような、心に響く唄だ。伴奏のギターを弾く二人の老人がとても気に入った。淡々として表情を変えない。いい音だ。ワインを届け、年を聞くと八十を超えるというではないか。私は、まだ七十前だが元気なあなた方が羨ましいといったところ、私の英語がうまく伝わらなかったのか、私たちのテーブルへ来て「ハッピー、バースディ」を歌いだした。

翌日、イレブンに夕食の予約を入れ、ドアを開けると、テーブル担当だった若者が、カードを大切そうに取り出し、昨夜はこのカードを失わないように胸に抱いて休んだという。ソムリエはじめ店の人たちが、二日続けてやってきた私たちに心のこもったサービスでもてなしてくれた。この際、明日もこの店にしようと意見が一致して、三日三晩、通い詰めてしまった。三晩目には、さすがに、シェフの J・ケルパーさんがテーブルまで来て挨拶し、特別の一皿を作ってくれた。

妻と二人でふらりと入った魚市場の裏にある小さな店の昼飯も良かった。注文の間もなく、二センチほどの丸い茸を干したようなつまみが、皿に山盛りで出てきた。サラミ風の味としぎしぎする歯ごたえが冷えた白ワインにぴったりだった。何かの燻製だろうか、正体は知れない。並べてある鰯が新鮮なので、塩焼きにしてもらった。レモンをたっぷり絞って平らげた。塩の味も良い。この土地のご馳走だ。
菓子は、友人ご推奨の「パステル・デ・ナッタ」が一番。クリームの乗った焼き菓子で、ベレンにある有名な店が焼き立てを食べさせる。一口半ぐらいの大きさで、あっさりした甘味は先祖代々の秘伝といったところか。二つ食べたが、美味しいので、もうひとつ注文してしまった。

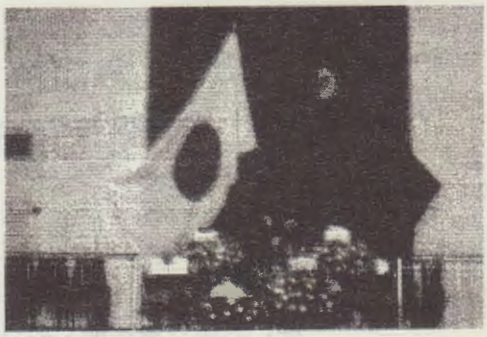
妻に長旅の疲れが出たため、予定していたヨーロッパ大陸最西端のロカ岬見物は遠慮し、同行のお二人で出かけていただいたが、写真を拝見するとお花畑と断崖の上に立つ灯台の風景が素晴らしいものだった。私たちは、まるまる一日、ホテルで休息していた。妻の好きなアイスクリームを買いに町へ出たぐらいで、昼寝三昧。リスボンまで来て昼寝をするなんぞは人生最高の贅沢かもしれないねと二人で笑った。

＜投稿原稿＞

# 日本とミャンマーの絆

井田　武宣（Ｓ３１）

## １．プロローグ



「ミャンマーって何？」

「国の名前かぁ。知らなかった」

「昔はビルマと云っていたのだよ。1988 年に国の名前が変わったのだ」

「アウンサン・スー・チー？女性でしょ？軍政権によって監禁されているのでなかったかしら」

「彼女は、ノーベル平和賞もらっているらしいよ」

「そうかぁ」

「軍事政権って何か怖い感じがする」

「街を歩いていて怖いという意識は浮かばないよ。市街は笑顔であふれているし、一度行ってごらん」

「『ビルマの竪琴』知っている？」

「竹山道雄さんの小説でしょ。でも、竹山さんはビルマに行ったことがなくて書いたのだって。なんか凄くない？」

「中井貴一主演で映画にもなったなぁ」

「日本兵の水島上等兵が、戦後ビルマに残って戦友の慰霊をする物語で、戦争の悲惨さを淡々と語っているのがいいね」

「でも、小説は、ビルマ人には人気がないみたい」

「どうして？」

「僧侶がビルマの竪琴を弾くのが不自然なのだって。日本で云えばお坊さんが三味線を弾きながら巡礼するようなものらしい」

「やはり、国が変われば価値観が違うし、見方が違うなぁ」

「そういえば、私のおじいさんがビルマで戦死している」

「それはお気の毒ですね。ビルマでは約１８万人の日本の将兵が戦死しているし、最も悲惨な戦闘はビルマを経てインド領まで進攻した『インパール作戦』なのだよ」

「戦場になったのだったら、反日感情も強いのでしょう？」

「確かに戦争は、戦場になった人達が一番悲惨だよ。このことは忘れてはいけないね。でも、日本と協力して独立を勝ち得たことと日本の軍紀が良かったのか、中国や韓国のような反日感情を直接感じることはないよ。賠償も放棄しているくらいだもの」

日本人のミャンマーに関する知識は良くてこのようなものである。

どうしてこんなにミャンマーという国が知られていないのだろうか。

その理由は、日本にとってミャンマーという国が政治的、経済的に利害関係が薄く関心がないこと、メディアがミャンマーに常駐できないためにタイムリーにニュースにならないことにある。

私は、1980 年4月から3年間にわたり在ビルマ日本大使館に勤務し、それ以降ビルマ・ミャンマーに関心を持ち、ミャンマーが軍事政権であろうと「ビルマ大好き人間」になってしまった。

それは、貧しさと関係のないビルマ人の笑顔、心の優しさは真の心の豊かさを感じてしまうからである。

## 2. 日本軍との関係

ビルマは、英国の植民地であった関係で、1940 年以降、青年活動家アウンサン（スー・チーの父）を中心にビルマ独立運動が高まり、一方、日本は鈴木大佐を長とする特務機関として南機関を発足させ、ビルマを経て中国支援ルートである援蒋ルートの遮断（インパール作戦につながる）とビルマの独立を支援するということでビルマ工作を実施し、日本・ビルマ双方の利益が一致したのである。

アウンサン将軍

このような背景のもと、アウンサン以下ビルマの 30 人の独立運動の志士は、1941 年6月に日本船でラングーン港から脱出し海南島で日本軍の軍事訓練を受け、12 月8日、太平洋戦争の開戦とともに南機関員とともにビルマ独立義勇軍を編成し、英国からの独立をスローガンにビルマ南部に上陸した。

独立義勇軍及び南機関は、首都ラングーン（現ヤンゴン）を含むビルマ南部を占領した段階でビルマ人による臨時政府設立を考えていたが、日本軍部は、先ず日本による軍政を敷くことが先決で、ビルマの独立は尚早と考えており、考え方に相違が生れてしまった。

長い英国の植民地支配に抵抗し、日本軍と共に戦い、ようやく英国を追い出しただけにアウンサン以下は日本軍に対する失望は強かった。そのうち、英印軍の反撃が始まり、日本軍の旗色が悪くなると、このままででではビルマが再び英国の植民地になってしまうという判断のもとに、1945 年3月 27 日に突然、日本軍に反旗を翻した。

これを記念して3月 27 日をビルマの国軍記念日とし、暫くは「抗日デー」と紙上

に表現していたが、今では、「反ファシストデー」と表現している。これは、親日的なビルマ政府が対日戦時賠償を放棄し、その代わり日本から多額の経済援助を受けたこともあり、最大限、日本に気を使って修正したものである。

対日戦時賠償を早期に解決しその後

ビルマ人は、確かに日本軍がビルマ独立の恩人であることは良く知っているが、それを日本人が恩着せがましく云うと直ぐ横を向いてしまう。ここにもビルマ人のプライドが見られる。

日本軍と共に「英帝国主義と戦った」という意識は強いが、「日本ファシストと戦った」という意識もあり、ビルマ軍の創設経緯から自分たちは日本軍の傀儡でないということを強調する必要性から、「ファシストと戦った」ことを強調しているように思える。

### 3. 日本軍の伝統の継承

日本で軍事訓練を受け、共に英印軍と戦ったということで、ビルマ軍は、日本軍の影響を受けていることは間違いないし、むしろ誇りとしている。

それは国軍記念日の観閲式を見学するとよくわかる。

観閲式の行進曲は「肩を並べて兄さんと・・・」の曲である。

ビルマの軍歌は、「抜刀隊」など日本軍の軍歌が多く、ビルマ将校の日本軍歌の評価は、日本の曲は勇ましくて良いということである。

また、ビルマの軍人は、「我々は日本軍の伝統を受け継いでいる」と自負している。ビルマ軍は、家族とともに駐屯地に起居しており、反政府軍が攻撃してきたときも決して逃げず、玉砕を覚悟で駐屯地と家族を守る。彼等は、「かつて、日本軍は、十数倍の敵と戦った」と云い、日本軍を尊敬しており、我々も「日本軍のように戦うのだ」と云う。このようなビルマ軍の誇りが、今日までビルマの独立と平和を支えてきた。

また、南機関の鈴木大佐は、ビルマの独立のために献身的に働いた人として尊敬されている。鈴木大佐がいかにビルマ独立軍を育て、ビルマの独立のためにいかに尽力されたかについて、３０人の志士の一人であるネ・ウィン（前大統領・議長）からビルマ国軍将兵に語りつがれており、国軍記念日に開催される国軍の歴史の展示会場には、必ず鈴木大佐関連の資料が展示され、その業績が広く国民に紹介されている。

1981 年には南機関の業績を称え、鈴木大佐の未亡人他７名の南機関員がビルマ政府に招聘され、最高勲章である「アウンサン称号」の授与式が評議会（国会）で行われた。

日本とビルマは一時敵味方に分かれて戦争をしたこともあるのにかかわらず、敵方の者に勲章を授与する例は世界でも~~稀~~。珍らしい（SEE General Civil is Latter）

## 4. ネ・ウィン政権時代

戦後、ネ・ウィン大統領を中心とする旧軍人による政権が長期間継続したが、経済政策は失敗し、1987年12月に国連より後発開発途上国最貧国に認定されてしまいネ・ウィン体制は崩壊した。

この間にあって、日本は、経済支援国の80%を占める最大の援助国としてビルマの発展に寄与しており、ビルマ人にとって日本は憧れの国であり、最大の支援国として扱い、親日的であった。

ネ・ウィン大統領

チ・ライン外務大臣の持ち歌は「♪向こう横丁のタバコ屋の看板娘・・・♪」だった。「♪見よ、東海の空明けて、旭日高く輝けば・・・♪」の愛国行進曲などを知っている人も多かった。

このように多くの政府要人は、日本を好意的にみてくれていたが、日本から来る政治家は、ビルマ政府要人にワンパターンで太平洋戦争の謝罪をする。横から聞いていると、何かビルマ人の気持ちとフィットせず、「謝罪しなくて良いのになぁ」と思ってしまうこともあった。

## 5. 新軍事政権の誕生

1988年、全国的な民主化デモにより軍ＯＢを主体とする社会主義政権が崩壊したが、国家の危機感を感じた国軍がデモを鎮圧し、国家法秩序回復協議会（SLOC）を組織し、軍事政権が新たに誕生した。これが今日まで続いている。国名も「ミャンマー」となった。

たまたまイギリスから帰国したアウンサン・スー・チーは、国民民主連盟(NLD)の書記長となり、軍事政権に対抗して反政府活動を行い、1990年に選挙を行なった。

その結果、国民民主連盟が圧勝したが、軍事政権側は民政移管には堅固な憲法が必要であるとし、選挙の結果を無視し、今日まで政権移譲せず、かつ、アウンサン・スー・チーを1989年以降３回にわたり自宅軟禁、若しくは拘束して今日まで続いており、国民民主連盟の活動を事実上不可能にしている。

この２点が西欧諸国にとって容認できないことであり、日本を含め経済援助を中止している理由である。

日本は、2001年には無償資金協力21.2億円、技術協力33.2億円の援助をしていたが、西欧外交に追随し、2003年以降南風政策から北風政策に転換し新規案件のＯＤＡを中止している。

## 6.最近のミャンマー

日本に代わって中国、インド、韓国が進出している。

中国及びインドはミャンマーの内政に関心を示さず自国の権益を優先して友好関係の緊密化を図っている。

特に、中国は、自国の経済発展、特に雲南省の発展のためにもミャンマーの労働力と近代化が進んでいない膨大な市場は魅力的であり、更に今後もミャンマーに接近するものと思われる。

一方、ミャンマー政府は、中国の支援が得られるから日本など西側の支援を必要としないと考えている。

また、2004 年、ミャンマーの民主化は明らかに後退してしまった。５月に憲法制定に向けた国民会議が８年ぶりに再開されたが、アウンサン・スー・チー率いる国民民主同盟が頑なに会議をボイコットし、国民民主同盟の和解の場を失い、10 月には開放経済推進派で、アウンサン・スー・チーと軍政のパイプ役だったＮＯ２のキン・ニュン首相が権力闘争に敗れ解任され、かつ彼のバックボーンであった軍情報局（Military Intelligence Service）も解体されてしまったのである。

このため、ＮＯ１のタン・シュエ議長の権限は、益々強大になり、例えば、2006 年３月に突如としてヤンゴンからインフラ整備不十分なビルマ中部の町ピンマナ(王都：ネービードーと呼称）に国防上の理由で首都機能の移転を強行するなど独走し、これを止める側近がいない。ネ・ウィン独裁体制時代に時計のネジを戻してしまったように見える。

## 7．今後のミャンマーとの関係

経済援助のないのが縁の切れ目で、また、世代交代が進み、今や親日感情も陰りが出てきてしまっている。

昔は街を歩いて「日本人ですか？」と聞かれることもあったが、最近は「中国人ですか？」「韓国人ですか？」と訊かれる時代になってきている。

日本のミャンマー関係者、日本軍将兵や在ミャンマー日本大使館の人達が戦前から今日まで築いた親日という努力や財産を限りなくゼロにしてしまったことは残念であり、影響力の減退の虚しさを感ずる。

確かに軍事政権には問題はある。軍事政権の見解は、民政移管をすると少数民族の反政府運動によって体制を根幹から体制を覆されるリスクを負っていること、アウンサン・スー・チーの解放もこれを助長するものであると主張する。

ミャンマーは、多くの少数民族問題を抱えており、独立を掲げている反政府運動を展開する民族もいるので、他国の云うように容易に民政移管できない事情がある。また、アウンサン・スー・チーの率いる国民民主同盟の妥協をすることの知らない姿勢もこの問題解決を複雑にしている。また、アウンサン・スー・チー自身が英国人と結

婚し、豊かな生活をしてきており、軍政の弾圧もあるが、国民感情的に日本で想像するような国民的英雄にはなっていないのが実態である。

ミャンマーの人達は、誇り高く、第三者からの干渉は大嫌いな民族であり、外国の意見は聞きたがらない。「ミャンマー人は、ミャンマー人の手で国内問題は解決する」というのが基本スタンスである。そして、ミャンマーは、長い間、鎖国的な状態で、ようやく 1997 年にＡＳＥＡＮに加盟したのであり、政府要人の国際感覚が遅れている国でもある。

そして、日本とミャンマーの太かった絆も将に切れようとしている。

このような国、ミャンマーとどう付き合っていけばよいのか、難しい問題である。

やはり、アジア政策全般を考えたとき、ミャンマーの内政問題を棚上げし、中国のミャンマー進出、覇権主義の阻止を第一義とする視点で捉え、かつ、人権を振り回す西側外交と歩調を合わせない独自の外交政策が必要であり、日本の権益を重視した二国間外交を推進しなければならないと思う。

その上で軍事政権に対しても少しでも民主化のプロセスを前に進めるよう継続的に働きかけなければならないと思う。

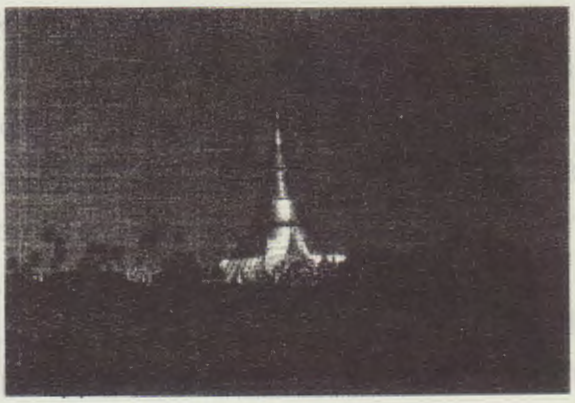
それには、日本の政府要人が、日本とミャンマー関係の歴史を知り、親密な交流が必要である。

日本の総理大臣が最後に訪問したのは福田総理による 1977 年で、30 年近く訪問していないのだから、日本との友好関係も薄れて行くのも無理はない。1983 年３月に安倍晋太郎外務大臣がビルマに来られ、雑談で「ビルマという国は、他の東南アジアの国と違って援助をねだってこない国で、可愛げのある国だ」と云う趣旨を語っていた。父親に随行してきた 29 歳の安倍晋三青年秘書が総理として再訪問を期待したい。

しかし、中国よりの現軍事政権下においては人脈も少なくなり、外交は難しくなる一方であるが、新たに人脈を構築し、中国やインドの戦略を阻止するためにも経済援助再開を含む南風政策により、貧しくてもプライドの高い国「ミャンマー」との良い関係を発展・維持してもらいたいものである。

「次の世代でもう一度、『日本』とパコダの国『ミャンマー』の絆を強く！」と願うばかりである。

（＊国名の変更により 1988 年以降は「ビルマ」を「ミャンマー」として記述する）



ゴダの国のシュエダゴンパコダ

＜投稿原稿＞

# 姉歯事件について

城北会千葉支部長　尾崎　英二（Ｓ３１）

姉歯事件については、一時盛んに新聞やテレビで犯人探しをやっていたが、永田議員の偽メール問題が出てからは全く報道されなくなってしまった。私なりの考え方を述べてみたい。

いろいろと犯人探しをやっているが、建築を造るシステムを変えない限り、問題は解決しないと考える。

建築のシステムを変えるということは建設会社による設計施工をやめるということである。

建築家法を制定し、建築家は独立して設計監理業務を行うことが必要である。

生命を預かる医者は独立しており、財産を預かる弁護士は独立している。　即ち基本的に医師会、弁護士会に所属しないと仕事が出来ないシステムとなっている。

命と財産の両方を預かる建築家が独立していなければ国民の生命・財産を守れないことは明らかである。

現在では一級建築士であれば誰でも設計が出きる。一級建築士の２，３割が設計事務所に所属しているがその他は建設会社、官庁、大学、一般会社に勤めていて設計もやっている。

これらの組織では建築士は独立しておらず営業や工事部門の下で設計協力をしている。

これでは問題が起きるのは当たり前である。

アメリカやヨーロッパなどの国々では独立した建築家が設計監理をしている。

日本でも役所（国や市町村など）の設計は設計事務所が設計しており設計は分離されている。しかしながら民間の工事では設計施工が許されている。

我国でも戦前は建築家の団体が建築家法を国会に提出し設計と施工を分離することを提案し、５回程衆議院を通過したが貴族院で廃案となってしまった。

又戦後は全国焼け野原の状態となり、雨露をしのぐという発想で一級建築士を大量に生み出し、一級建築士であれば誰でも設計が出来るというシステムを造り現在までやって来た。

今こそ設計と施工を分離するというシステムを構築しなければならない。

今回は検査機関の問題点も指摘されているが、現状では検査機関も独立していない。相変わらず役所の検査機関も残っているが、民間の検査機関を設けた以上、猶予期間を置くにしても役所の検査機関をとりやめ、役所は民間の検査機関をチェック及び健全な育成を計るようにすべきである。そうでないと役所と経営基盤の異なる民間検査期間は役所の申請料よりは高額となり、役所と張り合うのに申請のチェックに要する期間を短くするなど無理な方法を取り勝ちとなるからである。

現在国交省で進められているのは、あくまでも罰則を強化する等の方法であり、これでは到底問題の解決にはならない。

◆投稿のお願い

城北会千葉支部会誌は、毎回、定期総会に合わせて年１回発行しております。皆様の投稿をお待ちしております。

学校時代の思い出、現在の仕事柄感じていること、教育についてのご意見、ご趣味について、随想等何でも結構です。

投稿は毎年９月末までにお願いします。

投稿は下記事務局まで、Ｅメールまたは郵送にてお願いいたします。

住所、氏名、卒業年次をご記入ください。

城北会千葉支部会誌　第３号

平成 18(2006)年 11 月発行

発行：城北会千葉支部

支 部 長　尾崎　英二（昭 31）

副支部長　斉藤　徳浩（昭 32）

副支部長　本橋　輝明（昭 34）

顧　　問　齋藤　和子（昭 29）

事務局：〒273-0042 船橋市前貝塚 270-25

本橋　輝明

電話　090-6021-7397

E-mail: mteruak@attglobal.net